惜陰庵録

六

昭和八年九月下浣起筆

特別
イ4
1919
454

176719

措餘考録 六

○午後の四時まゝ酒の時刻ゝ一寸一時間あゝ、北方の走塗を焼んで、アツト、ウンドムに、東頭の巷を吹いて、文ゝ知らう書を聊う興味と気ゝれことを書きつゝ、ホ石川の武蔵屋の呉服屋の札が来れ。よゝ見ることゝの家の自慢は電話の番號があるらしい、其番號は五二九一番だからゝとふゝ一番と渡めるゝ。うまい番號と云ふ事だ。

日本橋通三丁目のあ島武吉と云ふ人から千紙が来れ。北北人は良りゝ、一ちやゝ屋と云ふ酒亭を開くとかで、あゝ頼つ為めの〆ツチれ余の隠業中

38- 9240

の酒吹出十則の語を用ひ用ひたいと云ふて来た。四月初旬書き出した。

一ちやろ集一ノ三　十月

酒姿十則

三酒の寂

夜半獨り起きて飲む

愛人去つて飲む

春城先生隨筆

病中飲む

旅舍に獨り飲む

銘酒菊華　酒亭一ちやろ

一ちやろ集一ノ二　十月

酒姿十則

一酒の清

清新の晨飲む

浴後飲む

春城先生隨筆

流に臨んで飲む

酒器を調へて飲む

銘酒菊華　酒亭一ちやろ

一ちやろ集一ノ二　十月

酒姿十則

二酒の閑

釣を垂れて飲む

雨を聽いて飲む

春城先生隨筆

月を賞して飲む

銘酒菊華　酒亭一ちやろ

電話番號變更御知せ

大塚(86)五二九一番

小石川區小日向水道町

武藏屋吳服店

（第代）

一ちや廬戒四則　大聲唱歌　乱醉暴論　盃中笑々

席外献酌　他座問答

輪陀志阿那多伽大壽經

日本橋通三丁目三

菊萃の庵主　一ちや廬

○山杉の左の出處いこんまつぶ牧問とうてゐれが、近代漸やくゝゝ、元の山城淀の藩士杉森家と倫の二家間に擬ん心杉森氏の祖先いこの近代の淀井氏を仕くれが、山杉の祖又と称る杉森市兵衛信重と型つも豊臣家

横原製

に仕へ大坂の陣に木村長門守重成の手に屠られ戦ひ、後藤後、稲葉正則に千石で招くられこの人の二男杉森市左衛門信義が近松の父と称るが、俗説の杉平忠男に仕へ、後浪人して京都に住み六十七歳で世を去つた。その二男信盛が即ち近松の父であると云、役人の由緒書に、武士の出身であることが疑ひなしと認められた。

○前述に記事を載せた近松の菊藤の葉に氏を宗とすることを云ふとおもふ。此れ三十式の此の技術が十分現のんらいのを芸術とする。

○今夜の遊芸なが朝の海苔で沙の劇の面シリ

1ｏアントニーの演技、マルチヤント、ウエニスの法廷

の物で、中継で放送をする。
ことのようである。此の朗読
は心臓をあらはすのが目的
で、此の朗読は、けわずま
誰にも真似のまねが無いし
道道のつたひもこんを続
けるようなかが無いとこ
が、道道の出きと静寂
豊富のまねが一人もこの
道は七十五歳の老齢で
此前とは大限諸事で三
時の一部は改まず、ブッ倍

樣原製

（十月五日）

けれ、実に エライ・ものだ

○中央公論社の『直言』誌の河合全集等の広告を二十篇：達もあるが、努力中だが『自分も今後の意味で、其の頼まれる仕かたで、人間造造』と三日を費やして書を綴る

公論社、宮本氏。其人の存在する目前に光やうしのを書くいこんが初めて、如と新業に気楽悠んかし光。長い河のいろくの感想を書き、既白紙の文学統一の功を傾倒

の豪傑像の豊臣に比し光。こんも宣伝の時勢の一つ光が果してどんなの利キ目があるか、えの者も自造造といちい交りである。うら、一光は感想を書きたいと思つてゐるが、何れ機会を得光のを書ふが造造を描すう生る霊流の美の特会のうへのうへ耶入る

○日本建築と西洋建築の異同は切り抜いてみるべきさ説明するあるとすると、日徒らにデテールル趣つて要をなくあることが常である。丈夫建築の術を培いかるべきである。高尚建築の一番異なる点は、外壁である相異る。西洋建築の材の石や煉化や鐵筋などであつて、壁が構法の支持体となるのだ、尤も堅牢を要するから、陸つて入口や窓も高くする譯であるが、日本建築では、壁の支持の役目をすることなくないから、窓や出入口をどんなに高くすることも出来る。西洋建築では柱や桁を壁内に塗りこめも仕為るが、日本建築では、北等の構造材が則ち仕上げ材であつて、美が露骨であらはれ一種の装飾

とる。あるいは他の大なる異因に屋根とある。日本の屋根の勾配がある一定の急勾配の場合もある、これは日本の風土が降雨が多いから、また雪が多くて、屋根をさかしくする工夫もあるが、日本建築の美観は重々屋根にあると云ってよい。屋根と附帯して昭りと軒先の反りの曲線が一層の美観を屋根に深くさせ、両側外方に深く突出した軒の深さも特色の一つで、日本の夏季の日光の直射を避ける為に軒先の高さを低くする工夫で住宅を開放して自由にしている工夫であることは上述を待つまでもない。屋根や軒の構造は支那風化もあるが、それが日本ナイヴーして一種の美観を添へることは云うまでもない。こんな色々の要素が

うるさい陰味がある。大体日本建築は木造で材料が主の基本となっている。自然を愛する日本人は材料である木を出来るだけ見るのを可とし、何も塗らない木地をあらいし、動かすべからざるものまで柱などの用へている。仏寺などの所でも塗ることは支那都鄙あるの特徴で、唐時代に、清廉のアクドイ色を淡泊化してあるから、五重塔などの丹色を樹林の中に埋もれるのが寂寞美観である。日本建築はどこまでも淡白で、国民性を通じてある、白い障子紙は最も好色の尾、素木板の天井、何人も何まで アッサリしてある所に日本味がある。

○つゞくて任とて来欧の旅を中断して帰朝する。所謂講演すべきことの如きである。東京講演（今度見たい）
しと北京の講演は四王天延孝のフリーメーソン秘密
結社とか、ちい講演は陸軍中将の
ユデヤ問題と新しい書物の著者「犬養毅」氏の
人の著書「犬養毅」氏の「ユデヤ民族の研究」とかいふ書物がある。北の海
道のユデヤ民族の秘密結社を論じたものだ。フリー
メーソン結社とかいふものは秘密結社である。行のんでゐる
ユデヤ世界の陰謀を二デヤ本国後無の第五回
論じゐるのだ。世界の人の気と勢がつかする長る
けんかも、仏蘭西の革命も佐藤氏、世界政
争の根本やこん、露西亞の革命もこんと、一つ主

証されてゐる。所謂ユデヤ三インターナショナル十九世紀後
であつて、革命を引き起こして共産国を撹乱する
バユデヤの復興と資本主義から、潜行的
な秘密の運動をやつてゐるのだ。実は侮るべ
らざる勢力があることを証明する。
デヤ人排斥を行つてゐる。猶太人の二
八分敵である。実は北欧民族は世界の
中心である。二万三十一輪の講演と招け

妹崎博士と書かんと「仏支丹禁制の終末」とかいふ書
英本未禁数一件で、新しく書いたものを読んだ
のは北書と新しくちがう。全体徳川氏の鎖国政策
ハキリシタン教の壮絶を要して起つたものである。

美が約三百年も續いて、今日の開國となることゝなつたのは、禁教も自然解けて行くべきものの勢ひであるが、ここにまた掩蔽のあるのは、開國とともに同時に復古の主張から發した一段が唱へられ、神祇者なるものが設けられて神道が擡頭したのは、異教の禁を解くことが出來ないとの口實の下に、異教徒は神道をもらつて動かすも廣いものの、異教徒の宗教が亦開國とともに、さて昔しのやうな酷刑を隱れもなくなつたのは、法王の公使が環視してゐる、種々の勸告も出るのは、政府が追々國際的信義分を行ひ、法蘭西の數が甚だ大きいのが、諸々の據つて來たる虐待もしたが、陷合亦致

複原製

したことは少なくもあつたが、異教の教徒の苦しみは實に之のことを物語るものであつて、また等の事情が甚しくなるに至つて、開國傳道の先人、岩倉具一行が歐米へ出かけたが、さて到る處、岩倉等の宗教禁遏の事情を質ねたるに、無を生ぜずから本國へ人を遣して禁教を解くことを申出で、異教徒は初めて自由を得たのであつた。此の後の禁教實例合一件は、[illegible]八、[illegible]偉が六七年間に亘つて事件となつたが、[illegible]女の樵夫の眞味も無くなつた。此間の文書の大體家に在つたものは、宇和島の國学者に花しくあるが、妹崎に見せて、一つも引用しなかつた

○午後東京美術学校へ行き、第二回展覧会美術品の展覧陳列あり、行き見る、前田侯爵家にて
をさせる大阪と展覧に入札するという
あり前田の展覧伝数いろいろ書画に達したとも
くあり、才二回ろ今回の品は敵と前田に譲らるべ
敵かある、伝聞数三百の内、山陽仲甫が実人と
三分の一を占む、百家研究ろ、実に得易からず
さる様ならずよくも二家のものを集めたるもの
絵を出きるろ域に達したる仲甫の絵を四十四
五を数ある様あつたり多くは仲甫西湖中よりあ
るようだ、名物と云ふ方が多く、例の船宗山載画
冊も此内に含まれてあるが、前田ろ委書画が多

かつたが、ろなハ松意が多い様に思はれた。どんなどの傾
を生ずるか、就ん表等を熟覧することがあらうが、
実に今日等い雷同して敵が出来ろへ。矢張り山陽
趣の様波を受けた仕合であるまいかと思ふ。山陽の
書画も四十数点を数ふるとあり、大家の二行幅
大家数ろも用ゐつくるものがまかつた、マトロの絵幅よ
り巻子や十数点、昔のきの尚手(外来を味ふ)と(御)無視(行)
のあることが多く、山陽の絵ろ
出てあるが、平華に刻して異へ印、研也二三面
の地図ろも上手ものもあり、和漢
名物では大雅堂村の十便十宜の書画冊もあり、昔
堂の雅ての東山清水の絵ろ細道時分の研究

也なり。木米華山、乾山、一休、蕉河原、雪村、為春
等の傑の高く〳〵そうそうたるものが多かつたと
八百天の為めあまの素観家がすかつたのと、観覧
すい都合よく、後くり列品をひろつて眼福を得た。

（十月八日記）

北の列品を言へば大方目録の巻考と
七種家の画論や心為の像また印刷さん、山陽と
親しい余の陶器、山陽らと摘録したものが多
く、第一回の分と共に家賜を受けてあるのと、
一旦実物を見て、その方を観覧する心初めて
味を覚くる、尚は第三回目の表示もあるのを
七月品は都合下ることである。

双鶴庵列品中、数六十手帳に書きつけた録抜萬
八左の如し

大雅堂大機拓東山を画す方芙蓉の数峰を
往年世間未見、来京其遷時、池貸既席路信
而待其返、北一帖殆之、不交言而別之、南時兵乱
風流を想也　甲辰春三月涼夜　□□

山陽帝額「青天白日」岩瀬氏云く丈夫心事南光
霽すること薛文清曰、大丈夫心事、南如青天白日
使人得而見之可也」

「日額」なる大書信者三高く得其度則是以合
焉、過其度則是以破焉」

研

蓋表 山陽寺海龍硯

蓋裏 金書 煙國之欲ト硯主人 北硯書 余書

余翁曰 五家海龍硯 在此郡 益信彫

山摩之真奪船手 山陽外史

北硯 松方公傳来 煙国之瑞 山島彫山刻

亀齢帖二十冊

山陽竹田 景文 梅逸 基度 海屋 景樹 白雪 昭陽 玄

蘆 豊彦 小林 大平 春琴 春好 杉庵 秀彦 [illegible]

岸岱 [illegible]

此の亀齢とこの人が山陽の詩書を所望して一帖とされし

ものがあり、それの自分の筆やうなるが、亀齢は月琴

[illegible]

を業とするあでやかなることいふまでもなつかしう思ひ

のが、彩りなどと思つてゐた所、北の画帖をみたのが、因

是四人ばかりとなりこれが北海列の因縁をみること此

の日記の板草かあつて、月琴家の亀齢といふ

此人とあり、日記にはこれを伊東(亀井昭陽の弟)

[illegible]

[illegible]

[illegible]

汚めたとあるがこの二十帖の画冊も大体山陽の筆意の
人を待つあり一帖づつ書いたと覚えるが中ごろ
面白いものを見受けたが貴方の[illegible]帖の
印刷物とは全く其人が異なるやうに思はれるが試に
一人かあるべし

豈恬[illegible]画詩書保恬

紅樹青林淡又濃 毎逢山翠[illegible]春信不賒
精英緑秀墨光揮 一点山
山陽外史[illegible]

曾つて山陽自画山水小幅二枚を見たことあり、
此時の墨一点山と言へば、実に紅樹紫精

標原制

黄緑の字を以つて彩色してある点に興味を
覚えた

彩色版画
東海道五十三次
の内廿五枚
素晴らしい印刷
彩色刷
日清印刷製
東京市外
東五軒町三十
文市嶋謙吉

此袋に納めたる豆帖の表紙が小粉の板を
試みる一標本也 此表紙は表板本を除
紙する時除き彩色を加へしも、此方法如
く粉ふるさりし、袋ふる豆本ふるも
斯く彩色除のとこの如き方法の如
あらざるべし、印刷技術の発達

●の一編を見るべし

○多白市屋の刊り物等陳列中の大江湖池家の肖像書画扇を見る、各面皆骨つきて実数多く満つ、尚白他と陳列機をあはせ多数を集めるべし、大抵公の流の著名の画は皆有り、殊に湖世絵大家の傑作美人などを描けるもの多く見受けられ、日常の或る時代の美を新つたもの、蒐集癖あるものを見る、是真の画のあるものは殊に古き頃の人のあらさるを以て敬服、さらに〜の壮観也

ほ〜〜ハガラス紙にて解説のさるしことを

十月九日記

複原製

○春城のうら〜なる物の随筆代研究の序文代りのはしがき」左の如し

私は一と昨、毎年一冊の随筆を刊行するを例とせ、が、近年老を覚めて、思ふ〜、想淺く文拙く世に問ふの愛值かなきを。如何ぞ私の誕辰を同人の今会する春城等と共に同人かく私に随筆を書けと云ふ提議がありたの多合私が老境を入りて活般の仕事を許してかく閑散を楽し酒杯に親しみ為めに健康を宝しハたゆ、ことの幾人之から、仕事を作れと云ふ誘ひあらうと推量して敢て所すことろ〜即ち諾し、例のごとし

教授の開業を乗じたのみならず代作料
と云ふ標題の簡中の消息を寄するを見き
ずい

○先づ平尾贅平氏の銭幣の海外を入れたことを記したが、今此の名義者の淡路のから一二巻分とすることを指記するとと、夢を伊勢の不行尾が三代傳いその意銭家にあつて、その家の座敷紙の二銭があつたので、大銭家の伊勢参りの序を見ると此家を訪ふと云ふから此二銭を今の千尾の手のあるを以て時代の古物家の大関の東京の成伊柳北と京都の今井風山であつたから此の二人の義を今全部入京した所の手を指したと云ふ。

古銭の意味は為に金四七あるを人に渡したとか、また
年を追ふて毎年減ずる一方だと云ふ。支那の貨幣
で市場に出るものは宣統の初年の像の表
るのが多い。雲南の進献と傳るものといふが宣統
帝退位の時侍従が持ち出したものとかいふ。伊国人の
ロスと云ふが支那銭幣を集めるは是迄分るとあつて
此一枚を一番元を抑へ、人をして此と云はんとあることの此
と云ふく(百)円貸すとうとのひあるとうか、先此
月落到と貴方が田と笛の此とあるとうか、先此
地方へ移住してゐる支那人刻華僑の任意しか
ら公司が発行したものと云ふ黄銅五銭もあり、赤支
那まい米(信)信が銭貨と称隠してゐる二二の例を蒐

迷信に用ゐられる錢貨の二三を說明すると、王莽の布泉は男錢といひ婦人これを佩れば男子を生む、石勒の鵝貨は人をして富貴ならしめ、駒馬崇禎は產婦をして安產せしむ。周通元寶を通天錢といひ狐狸の怪を攘ふに用ゐ、篆書の唐國錢をサスガミといひ七枚を集め得て妖氣を拂ふべく、常に携へ持てば運強し。富壽神寶は日本サスガミといひ錢の腹中に納めて不祥を去る。長年大寶、萬年通寶、萬壽通寶、永壽通寶、壽昌元寶を產湯に入れて使はすれば其子長命なり、大觀通寶を十二枚船玉明神に供ふれば其航海安全なりなどいふ類數多あり。

○今閑天藪（壽齋）

城後の人久しく清香と花を訪ひ
もとめくれ、前月市を訪ひ時々話しに去る。此花
白梅二十首を寄せて十數日市を訪ひ
訪市時春風
生生事業無中、前知來歲今見公夜笑
時公夢後著、文名一夜滿瀛東

入場者一萬

さながら展覽會

松本雙軒庵の賣立

數年來の賣立として注目されてゐる第二回松本雙軒庵の賣立は十一日芝區濱松町東京美術倶樂部で行はれた、入札午後一時、午後四時から瞰札された

藤山雷太、藤原銀次郎、大倉喜七郎男、九條公、前田侯、松平頼壽伯、入江爲守子、正木直彥笹川臨風博士、根津嘉一郎、原嘉道の諸氏をはじめ實業家、學者、政治家等のほかに多數の學生も見えさながら一大展覽會のような盛況ぶり入場者は一萬人もあらうといはれを呈した、かくて九州、四國、北海道全國から集まつた骨董商五百人が長距離電話の作戰に火花を散らし落札を競つたが今曉二時過きまで行はれた、一時までの總賣上ばは二百五十三點、百卅六萬九千六百五十九圓である（今曉一時までの一萬圓以上のもの左の通り）

山陽賣天白日四字額一萬千百圓▽木米餘山幽居一萬五千九百圓▽吳春五幅對三萬千百十圓▽祥瑞在銘三段模樣胴〆茶碗一萬五百圓▽九十八圓▽山陽八枚折屏風二萬二千九百圓▽寧齋學式靈芝耳花瓶一萬千百圓▽一休鑑頭船居一萬四千六百八十八圓▽吳春草屋洗馬一萬三百圓▽山陽杏坪双幅三萬六千九百九十圓▽雅邦春景富岳一萬三千九百圓▽古筆大手鑑十七萬九千三百圓▽大雅無村十便十宜畫冊九萬三千八百九十圓▽竹田湖上釣秋一萬八千九百卅圓▽竹田春堤夜月七萬千九百卅圓▽崎青磁菊花八五萬三千九百五十圓▽竹田蘭背琴梅九萬三千九百八十圓▽東山御物、名物萬之細道蒔繪硯箱五萬三千九百五十圓▽竹田三名帖の一「船窓小戲畫冊」六萬三千九百圓

岩井三郎紹介

法印百八十枚第
用と達し自除
定額百五十万
用を三十枚第
用実破しなと
三

○生前友人の事を綴りて公刊するハ自分の絶対の任務のごとく思ふ道理なれと雖つれのが初めてあるを原稿を投郵したかも道理之れを出版の上ハ嘆ずべき果しても世間の感を惹くもあらんかと思ひ嘆息つてみれが雑誌社ハ道理まくるものとも思ふ之れ本しとの事実の誤りを一二点自身訂正かし兼ねし、おや流石ハ仕方なしに一度ハ感を接心相考ふを客のセを来ルのに一度ハ感すると左して直しに和ちなく、刊行前と道理が元れのハ自分ハ指しも仕合で初めを安心しに

十月十二日

○自分の随筆いこんまでハ早大出版部で出版すると例とし於ハ今ハ春陽堂の勧めに著しれのしかから出版不出版の事を一切自分の委任と一任しに然るに委任者の意向でハ、どうぞ流布を図ること度出力の可る社から出版すること限ることを、中央公論社に委任を示しに度、早速少部を流しにとの報告を得に自分ハいつも随筆を出すのハ何故度使を減くしたと切に望ることを主張するのハ出版ハ於ての免角の自分の注文ものの容れ難ども、二回以上出しきハ二回五千部の定価を附しに例するなる。必ず多く売る結方ハ無いかしてある。人ハ一回八十銭の定価を附しに立る頁数の多ハあるから、こんなを引下ることも出来まるハ先く出来を得に上ハ之を印税七分と定めに出版

郎の辛苦と信いけんぶも、自分の利益をも度外視して、多くの部数が流布されたい自分は美が満足であるのだ。

日上記

○が特産雑誌への標題を附してブックドム社の売買濃あり、典くは北海道新報に二回迄載したる北海道が主となるも、最初は若干の文捨を加へて共後刊行せしめんとしたが、稿者は、ずいぶん、多くの誤りがあるらしく、刪去を要するものが多く、日報に就て見ると、百三十余枚もあるが、六七頃あり、既に二百頁ばかり校了するものあり。自分五百頁を越へる部数となる。代筆紙と共に北海道が未曾有の出版物となるであらう

日上記

夫れの無いのは遺憾である。

△常陸丸遭難は日露戰役當初の大悲慘事であつた、記念碑は日露戰役史著者巽來治郎氏の選文である、當時其石摺を寄られたが今見當らぬ、巽氏は李軒と號し風變りの人物、氏の事に就て市嶋謙吉氏（春城）は早稲田學報八月號に左の如く記された、巽氏餘りに變つた人物且近江と關係深ければ左に拜借する。

早稲田學園には種々雜多の人が來り投じた、巽來治郎氏の如きは其異彩を放つた一人である。氏の體格は志賀重昂氏と同じく肥大で且つ強健であつた。漢學の素養も深く、殊に書を能くした、その當時小石川の高台にアウンバラと呼ぶ怪僧があつた、氏は其委囑に應じ其派の經文を撰んだ事もある。大字を書くのが得意で、嘗て大隈侯に代つて直徑二間の大字を書いたが壯觀であつた。氏は膂力人に勝れて鐵棒を折り曲げたり、拳骨で鐵板を擊つてヘコマセなどした。氏の書道の主張の一に、筆は毛筆に限るものではないとあつて、火箸や箒など種々のものを筆の代用として終には砲彈の辛ふじて動かし得るやうなものを操縦して、其尖頭で揮毫するに至つた。亦氏は書は座してのみ書くべきものではないと主張して、嘗て仰臥して書いたものを示されたが立派なものであつた。氏が早稲田に來り投じた緣因に就き高田氏早苗から聞た事がある、氏は北畠治房氏の勸めで學園の人となつたのであるが、巽氏の父の名は忘れたが此人は才學もあり、且つ擊劍に長じた幕末の志士で、其人の詩文の版本は曾て見た事もあるが、今は書名を思ひ出せない。曾て北畠氏はこの人と葛藤を生じて爭ふたが北畠氏の敗に歸した、北畠氏は敗を取りながら敵手に服して居たと見へて、其子である氷治郎氏を學園に推薦したのだといふ。巽氏は學校に教鞭を執る傍ら、出版部の一室を占領して外交史を著した。氏が學校以外に交る人物は所謂壯士肌のものが多く、出版部員に忌まれた事もある。外交史の引用書に陸軍省、外務省の秘密文書も交つて居た廉で、出版部長たりし高田氏と共に巽氏は訴へられたが、結局高田氏は無罪で、巽氏は若干の罰金刑を受けた事がある。巽氏は或る高官に識られ機密の任務を帶び、清國に長く居た事もある。

右記事中巽氏父の名、及出版物の名を遺してある。依て頃日市嶋氏に書を寄せ、氏の遠祖は楠正成の裔、楠正榮河内國

讃良郡木田村に農桑に歸し其孫始めて巽と稱す、系譜は私の手許に書き殘した、父の名は濟藏、祖父の名は太郎、遜齋と號した。宇は耀文、森田節齋、藤井竹外、齋藤拙堂等の門に學び、梅田源二郎、賴三樹等と交る事深し、然るに早世したれば歿するに丁り遺稿若干を其友水口藩儒栗齊中村鼎五、甲賀郡牛飼村の志士城多董氏等に囑した、明治十一年七月『遜齋文鈔』と題して出版さる。而してこの遜齋の妹愛女は西川耕藏に嫁して居るので姻戚關係ある旨を報じた。市嶋氏は事の意外に驚き左の返信を寄せられた。

（前略）巽李軒氏につぎ御手教を蒙り難有奉存候貴家の御親戚の事は初めて承知仕候、あの人の血統を承りあの人あることの偶然ならざるを感じ申候云々

李軒氏往年左の一詩を寄せられて居る。

○伊木壽一が明治十年三月廣島「就て」の中で一二行ばかしでもおくべきことがある筈いい時代と花押の式などいろいろ有略しても江戸時代

拜奠西川正義翁碑前

斯身致此國、一死有餘勳、雄骨地中歿、
遺音天上聞、千秋湖畔月、萬古嶺頭雲、
長繞烈士墳。

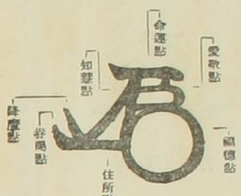
日上記

と足利時代の花押を略相体とふてある。彼の太祖の創めた形式を倣ふたからだ名が長くとのこるのであるから、笑ふべきことかどうかは北式を天平地平の方法を要し、お河さまの花押を入れるのである。徳川家康が義法の流行し又ら其天地を平像が無ばならぬと思へば仕方である。這を花押を自署することが面倒となつて、花押を白字の朱刺し、墨を塡めたこともある墨で塡めることを可成底ぬけになるのでハ九分ハ下来るが入墨し備えばかりこともある。同じ人の花押でも本人が入墨しれこともある。初用公用とさまくあつれの

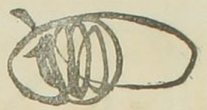
みちびき、或は住所向き或の約束をなす場合の花押を心づける例も多く、一人の花押のみを示す例も多く、一人の花押を示す例は二十数例である。尤も其人の年齢や地位などを考へて書くべきものであるが、其人の地位が高まると花押の形も大きくなり、書きも奔放の氣勢がかいつてゐる。花押の偽造を防ぐべく適合者を用ひることがある。淀君が花押を彫ゐ時、自分の花押をその月の大小と信濃筆書と和歌とがあると云ふ。伝説いろいろの場合の文書に伝説にとゝ傷伝もあり、或る人の花押の間に人間すべき針の孔を穿つも偽造の有ひとゝ例

花押は単に個人を用ひるのみでなく公共団体などもくい分けの役目をも用ひる。伊豆山田の三ツ判や津三郷同業団の判などがそれである。大抵の花押の関係師弟の関係などを自然似寄りの花押を用ひることもある。又から花押の形式と女の関係が見られる。僧侶などの花押は梵字などから花押を心つてゐる。洋学者は羅馬字を花押の輪廓の中に入れることもあつた。花押を心るに当つて面倒の仏教や陰陽道などが加つてきて、七点の式が立位の式などが行はれ、その次のページである。

佛說・宿曜道或は陰陽五行說等からして、七點の式とか五位の法などいふ法式によつて、その人の性に合ふやうに畫（くわく）（花押の線）や穴（けつ）（線によつて圍まれた穴）を作ることとなりました。七點とは第一、運命點・第二、愛敬點、敬愛點・第三、福德點・第四、住所點・第五、降魔點降伏點・第六、眷屬點・第七、智點慧身魂點で、この圖の如きものであります。また五位とは木・火・土・金・水でありまして、人々にはこの五つの性があり、木性の人ならば畫數は三・四・五吉、一・二凶、穴數は三・五・九吉、一・七凶といふ風になつてゐるのであります。そこで歸納字を花押に作る場合に、右の吉である畫や穴の數により、それに七點を具備させるのでありますが、若し歸納字の畫數が何うしてもその性に合はない時は、莊嚴點といふものを加へて、性に合ふやうに作ることもあります。兎に角かやうに作製が面倒であつてみれば、到底素人には出來難いので、隨つてこれが考案をその道の者、例へば天文博士・僧侶・學者などの、所謂書判作りに依頼致しましたことは、丁度系圖作りが系圖の作製を引き受けたのと同樣であります。

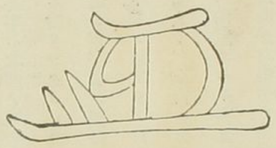


七點圖



日蓮花押

田中太兵衛花押



伊達綱宗花押型

松浦潔花押

淺野忠吉黑印

の時十五日秋時の来じ春候今日人金の為めに来遠
迄今を俗し、自動車をつらねてトウイツを試
む、二行十四人自動車三台に分乘、行先地を
磯子と定め海岸を東に停車場に着、茶を喫し、九時半中央
停車場を發し、前内相安達他花の紹介と係る八聖
殿を過ぎ、さて主客の、伊東美左ヱ門氏懇切に迎
を受けること詳かなり、北條を設計せる西来、八聖殿の海岸
の地りも一方海を臨み地は平坦を呈し爽
こ撃んば本牧一帶の海岸一望の内に入り、八
聖を四面に廻り、八角形の白壁鏡にて北條の

道場の文庫に似て紀摸大きく、殿内に種々大小
の洋室あり、自然別莊なるべし、横上に廣間あり
其床に八聖の像を置き、後に彼偶あり、偶い未だ
置くに列らさざるもの全部置かるべき筈なり
とせば、八聖は いづれにテスか、耶蘇教、定法、聖徳
太子、弘法大師、日蓮、
とす、木部二鑄像也
皆彩畫名人の作とい、八像の中間に秀れ
秀るは八幡の神鏡を置き、次に八聖を配し、
の神武帝、成法帝を微象するものとい、北の
堂に侍々深淵を僧する人を配す
る坐席あり、北の設備のごとく安しと雖ども金箔
十八畳間なれども有るの寄附を仰ぐとい

複原製

観覧終つて本堂を辞し自動車に向ふ十
二時半なり、走る走る、北に進む事凡
そ五哩、磯子駅を過ぎ、紀摸大きく、海に沿ふて国を
り、大小の砲台あり、大きい国体の家屋
あり、小さい家族の居宅にあり、国中の植
込風雅なる喜亭機の彼岸も部しかもず
して清を紀既すれば来る
無数の漁船を見る、北を西塞地帯として遠く
一抹の去岬を見る、北を横須賀、海中に粗果の
あるの地を浅茅海岸の産地となす、一路後方の
といふ、海辺の曙亦れなるあり、席上に幹事
より余の隠者の成り行きを報告す、市俗の

陪筆入代碑銘の名を撰び以て和文を誇る、一行時
邂逅の間物見人談笑酒き余元きすと酒を
含み、席上揮毫を求めみ、碑字家の四字
を知まず、此の出席者中宮城県村山郡村山
氏、奥田雪翁、大江之亮、武田信生、小林
望三、大石現自、坂口献吉、日野清一、山田信夫、石
塚寅吉、伊藤清三郎、十四人とす、時既に暮れ
電車に移る、夕刻帰宅
○京都使利雄氏、舞鶴鈴本家鏡二冊一帙の複製
本を配本して来る。北書の出崎文庫の複本にもとゆ
四市村の古花本にもとる。悔恨の大本であるが、
昔信仰の厳かに完本である。北書の奇部の古業家

の鏡を押紙があって、世尊寺所伝の字画と
あるが、伊藤信の掘り出した大皇陵の人本左の大家に従
二位権中納言伊長房に行成の筆と人びとある。果
して此人の自筆本にあるか否やは今参考する利し難
あるが、四花若雲村の訪書録に「鏡文初刻
の写本なるべし」とあって、行くて方が無難
らう。此の複製本に附属して冨田命雄の解説が
あるが、是に依ると天保本の新撰字鏡と記す
所関係があるものと推定せられる。世尊寺字
鏡の偽本もあるようで、えの点に真本の二字
を冠せしめて偽物と区別せんとの云はんとする。
零本であることが明らかなる惜しむべきに(十月十六日記)

○所生育も突如白玉楼中の人となりて、その生涯が終つた。実にアッケラカンの最後ひあるかな。病床とラクダ崖を接いて、その為めにバイ菌が入り、忽ちそれが脳髄を侵し、入院すると共に四十七歳の生涯を完全さえん、自分の生れた故郷外科の名医として聞かれた大きーを志ざしたが、施術○の消毒の目的が別の病かす大きーを志ざしたが、ことが無きあつて困る。自分が十年間も毎日毎日ワクチン注射を受けてゐる医者が海を渡ることひ出るが、外科施術の前後に必ずバイキンを殺する注射を施せば安全であると云ふが、自分の妻人ラクダ地獄を左祖するこひある。癌ちどもは見てみすくいけんども、別に変ることもないのに、えをもつて往々大ゴを巻き起すことがあるのは、バイキンが侵す為めであつて、所謂るもと吹いて傷を求めるとの比喩を云ふのである。濱口首相の切腹をもバイキンが侵した為かもしれない。若し施術の前後に注射を施したらよかつたのかも知れない。先年医者は三人の子つて、他の者つ家の工風を容んめ、ところ鉄瘤があると思はれる。濱口の病名を言が崖を拭いたきものを道に致の大事をもらしたこと、実に言語道断である。吾等毎日毎日の生活に今する結合に関の人があるが、多くもこれ以前者は毎今四五人ところきものは赤

一人をえつれことを悲まざるべからざるべし。　十月十六日記

○柳瀬日記ニ云ク　抗川集二冊を贈りきたる。抗川集ハ故桂恒忠の遺稿ニ冊ハ其の抄選ニ冊ハ其の抄選ニ冊ハ其の抄選

を本人い馬鹿があらばけるぬ
畢竟を知いに、其方が外交
しんことやの彼んが分使彼
社会焼失の跡を考き出ばいろ
出すあどの特拘が方い、
おかの方出しとせ彼がうろ
詩を百日位る考き出しに送るや、
変化がやつて来ると、抓川を公使とハ知らず、
ハ無事かと問むて、無事に成
彼る変で考くに其人が公使年人
ひあつたと知
ることや。皆る彼んの話法の風格を語さるもあ
彼んいおらいの名人ひあるが、彼んの上を行く公使が

あつに、そんへ吸封建で、彼んに其の者沢をひあつに。空封
かある紙鉄で毎朝男飛する其者が満会に御す
るのが、満会ハ アメリカ公使で其家族が祝杯を聴
きどよめき笑ひ山海のを、抓川ハ片腹いたく感
じ、空村をソット注意すると、マサカ満会の俺んの
故底とん思ハ日ろへひあらう、公使のマサカそん
なことのセきらい、そんい沿岸で判するひあらうと、
抓川ハ塗りつけに、新流石の抓川もガフンと
云つに張合もある。抓川ハ酒を呑んに、意が更ゆて
ばかりくるくると、徳利を跨間を忍ハやて猫を
することもあつに。抓川ハ書を新聞を書き又考く
ことを呑んに、陶つて砲術があつに、背筆イジリで

八産砲を得ることを没頭し、もぼく文部も出すけれど砲
を撃かーは地蔵びい木巻と日敗味びあるる。ある時抗
川が西園寺陶庵と木巻と砲銃を語よ此不、面人
生巻会いーはやうに立腹の評豈得自棄粉嚢穴
耶」の後びあつ此の切抗川自身七六弾此語を嚢
体を書いて会巻ーは其官をいが地者こてくてある。曾祢
[illegible]が仏役びあるは密集をと條約書を交換し此、其の曲
條約書の一通の日本文びそれを書くの日い書を訳くま
る抗川びあるべきはがーやりかはぎるくて、成吳を曾
根をおびそ書かせはが、五六のちかーつて曾根いやり
とのことを言いはるもの英語るも見へてある。祖
○知義抗川が放屁び者あかつれと言英語を後んひ、

放屁に就て意外驚き者きつて、徳川家康が天海僧正と養生の法を問ひ此時、僧正数件を挙げて答へたる中に放屁も養生の一とも挙げもある。此等とも特別なる放屁をガスを放散するは氣味のよいものび臭部の膨満を治し脳を鎮まるから、放屁を養生の秘訣と考へるの道理がある。随分有氣の内ふはガスが一杯腹部に満ちそれが為め飲食も成り難いものがある。個様な患者はガスを因しめるそれを放散することが出来るの。これを放散するとは相当の体力を要する。衰弱の病人は放屁不能びあるから、放屁の能否びおよそ体力を回復することも出来る。病気が漸やく回復に向ふと

放屁可能とする。こんを以つて四春の徴とす慶するのが先ずである。大隈侯爵が二度目の病に罹られたとき最初の兆きとりは放屁をやつたと、奥さんを敬くて統計を心つたことがある、あと、えんが出来たとき事休するのである。

朝の起きがけに板田通書するのは腐敗である。無意識力を以ては大きな形をとるとサツパリする。放屁する男性的と女性的とがある。大形を為すものの後者は微音を為する。性を屁を為しても形を為さしめるものがあり、伊藤こんを入れしとをみる。こんの伊藤卓侯の場合がある。

伊藤から男子と為も由義さきさることがある。

横原製

摂ハすブツ放すのを豪傑に屁がるのが、神人度坐ることを許さんことを以つて前島男爵が初度の洋行する時音楽堂にのの椅子を造し、左きて屁を催すのを、度い伊藤がから人をして切れまいと、臀を上げると埋伏仕掛の椅子がどこまでも臀をつき従ひ、漸やく離るゝ時分一番放つと、えんが東京と反響して、流石の男爵も堪へ切れず処々逃げ出したとゝあが、有名の失策である。

放屁も一つの習慣で忍ぶんるのでもるい。放縦と流るんば無勝手を為す、間歇的も連続的も出る、洛今音のまゝれ伊藤侯も出るを以つて誇る人すらある。

平等の幸大の失策で、西郷侯爵と云かあつたが

自から苦菲少人と稱した底の研究をしたので有名な人つた。加茂抗川などの共亜流で底彰の時代が終んでもなほ、隨分連歌の好きな俳人を困しめたそうで何の為に底と就て若干述べもあるやうな少へてみる。米英霸皇といへば戦爭も底を意味してゐるのだらう。野村靖がどこかの公使なりし時抗川は書記官であつたが、旅館に毎朝豪傑的教底を出やるので共彰が深客を驚かしたが、其の深客は家族同伴の米国公使で、驚くべき彰の大なるので、米公使の子あが笑ひの洞九のを抗川が間のつらいことを思ひ出村の注意をすると、出村のいふまま米公使いてサカ日本帝国を代表する公使の業と思ふまへ必

らず屬僚の為に手を推測するとあらうと平氣であつたのだ、流れは放底得意の抗川は閉口し公使で米公使等と同席の時は極まりがてるかつたとの物語もある。

彰の少人の思ふ通の内で最も思ふが夫婦の間柄を敍するに底を嘆き合ふ間柄とでもいふやうな文句があつたと記憶する。底を批判した記事を現かまつたもの抗川と共に而も底を現かまつたものである。底は俳諧を論じ或る場合に滑稽を試みたりするの自分は妙人で麦酒を飲むかくしがスキ時は愛を爆発する保し誰のもいふことは自分の底は奥くるる

筍（たけのこ）や菓類香を絶（たち）さこちいの未答る聊う香
高を新ちんとするのでもあるが、兎角秋の何かが腹が
もるが、芋や栗などの味がカスを生ずる材料だけが全体
秋の八分ひる）るのでがスを発生）する時と見くる
○中林桂州は自分も交くのあるが人だけが其の伝称をと
はいらるるる）きに此の其後もいらるるに。北人の未
名は隆任、名は長四郎、仕官して城の番士で、知
年は安政癸の卯年で高二石の者で
で高年八十六で没した。北久保田と長崎行の列
年で伝賞聞を受）した二の目の停者倫で唐
津侯の分政黙で、ここをせこやうな手家がある、
もこの侯馬の竜れと云ふ、生前の法あり敬直伝田定人

複原製

ちどが時々其の家を救つたことがあれとこと
○者の法度は大抵徳色家であつた、英傑の体利があつた人
でも此黙だけは陰がひそへ、みるの延公その三十七人の子孫があつ
た。あの人も徳色を持る者格者だ。こんが為め来潮をも可
なる異者のさんだ。あるこがこ信者と邪することを諫めること
到公の家ようは、どんの家康の血統である。公の血統を一人で
もなくしたし、公の偉到を傷くだいのが努力をみるのが
と考くれとをいんでもある。大御不とらるんに家齢伯母も
大の徳色家であつたが、奥向の言侯女中とある上藤と
底橋とこふが居つた、こんの御方家の出で、大藩双美
でこの河も居つた、慎子とこふが本名で、先が明ち唐橋で、
家康の御基本島津氏の附きであつた、日と伺

る美人であったから、(9)将軍も公然御いたが、不犯條約を
表守し能き御命令に服して、無事家老の女
峰姫がみそ家へ嫁した時、廣橋の其の御附となり
て随従し、御本丸の席を脱したが、廣橋が姫
娘したので驚きが起った。(10)峰姫が嫁した翌年公は烈公
の兄の齋脩に、死人が早世したので烈公が跡を継いだ。廣
橋は到頭烈公の過ちの(11)師となったのである。
が未だ久しく少しもなると大奥では上下を分けて懐想したが、廣
橋の胎内に胤を蔵して、一切を隠蔽して生家へ戻し
たのであるが、烈公は其の大事を聞
き、一番かえって密かに呼び戻して天下に置き、最中
(12)(有栖川宮の)を江戸へ呼びたいとの事を烈公は江戸へ知る

といふ時も振りを高の宮殿が起って、高時の執権の
御前を持て御しなと云ふ、高橋家の系譜さん橋さ
御入輿と云ふ事なれば、其の御嫁入りの事を御
と云ふのを胡麻化したのである。烈公も随分の考えを
石の身分を考へれば、能程のハマリ方であったことが想
像される。

○天保雪と年号は三度、偽さん(同)家庭後合を
一度した、夫分は喫物家なから、同家の同者や親戚
とは南の記録が有り、とんでもない同者が沢山
ものもうくるへが、廣後合とすること、良るべが
天生元及いるへものが出陳さんの。えん珠四郎の
ものが無くとも善(13)元得るといまれから雨も成

此の展覧会は毎月変更の後援であるとのことで、毎月変更の出品があるとのことで、何よりも目を惹くことは、当会が出発した新機械を買入れ、目前にしかしつゝを作り且つ製造を必ずや完璧を示すことである。

内閣官業時代から最新機械を導入する道程の経過を見て入会者の参考に新たなる。当会の出品の個具の内、目を惹いたのは、先帝天皇陛下天皇大正天皇の御新の日本式烟草洋式の烟具であり、えん容雅いものであるが武ハ格が表つたものである。外国殊に米国の烟具も一のちう多く出てゐたが、即つて日本のコレクターが再び集められたの烟草式千と云ふのは自然巻きつけられる、此のコレクションの中で最古の烟草、喫煙の烟草であるのを珍奇を覚へる。多くを用ひた烟具の必要も武法つたこと、石川五衛つの烟草であり、きせる煙いものである。名優の用ひた烟草もさまざまに出てゐたのが大切目を惹くのは喫煙力の烟草の変ひ方雅いとさまざまに分が兎に角機械様にもしくと云ふよりも、中に一間程のふのあるのは数多ちゐた。確うめ但の新鋭の特つた烟草四定忠流の用品も出てゐた。こんなものを一々味つて見ると角のの無いものも出てゐる。漫画や川柳烟草に関する種々の浮世絵も出てゐた。自分が面白

味を試しれのこいろ〳〵の銅器屋の看板であつた、可
なり古い時代の大きな板彫り（鬼）さみと云
ふ面を富士を鬼を彫上げたもの、明治以後の村
井其他の小天狗もあるが、自分等が学生
一しきり喫茶店に行くとレストランのポスターを見る
一種の懐かしみを感じた。ぬるまゆと思つたのも
伊藤博文が外人の手づから作られたといふ小屋
風の半度出てゐた。まえの公園が喫茶の西洋
茶屋のべしがさきまで賑はしたこんなど
小珠山と云へばきれい。内の先生方多く海外
さんもゐた。銅器の耕作の首（程）状況を説明してい
現りもあつた。鳥大名の銅具販売家は可なりある

標原製

ゴルが、現代の馬場の餘の谷幻花るとか北程のコ
クレヨンんび多く其の生品を見た　十月念日
銅具のコレクターの蒐集の内徳代の程々の程
数が多く出てゐた。今の陸入ることき形び一端よヒ
ウチ金が露出して装四等でもあるのが有る多
つた。えの飯う古い時代のものでいろ〳〵自分の
銅の時代の切りものあることもある。婦人持の銅色
小箱を色色いろの日と、銅赤を入れたものと別々な
ものもあれ多い但し きさるさ！を銅器入とく
りび結びをつけたものもあれが、えんらも
前の男子用のことく、右の品を金属のりサリび
鑿いれるが数点出てゐた。純の型を用ひて

ハあるがめずらしいグロテスクのようである。
野蛮国の烟具や喫烟の仕方などについてもいろ
くの珍画や烟具の実物も出てゐた。文明国の
さんの如き手軽なものもあるが、多くの奚迦と大きいグロテ
スクのものが多い、自分のような者を見ればまづ
今者くいまがうらいが、幸ゐ当つて来人の喫
烟道具に興味を就て書いた断片が見当つ
たゆゑ、左に参考として出めもあく

世界の文明のパイプの形貌ハ別庵葉で表し得るが
野蛮の土地ハパイプを用ゐず、土中ゑ烟草を
填め火を點して口鼻を煙ふる所く実の如
吸ふものもある。烟を私こ通して喫する法が在方
又行はれ、パイプの排生ハ私を通す枝の出来て
ある。私を通したる烟ハ烟を和ける一法であること
ハ言ふまでもなく、美が未開の地ゑ行はれてゐるの
ハ当然である。更ゑ烟を和ける一法として烟の
口に達する迄の道中を長くすることがどこの
国ゑも工夫されてゐるが、甚しいのゑ蛇を

編の亂れ亂麻のごとく或重なりぐんく巻
きしたやうなものもある。支那の河岸のパイプも亦一
数をなしてゐる。土製のものパイプは多く未開地に行
はれ、陶製のパイプは文化の地に行はれるが
通例である。未開の土地に数多のパイプのある
のは材料が豊富なのためであらうと云ふ。
未開地でも裝飾を欲する本能があるので、粗野
なる稚拙の彫刻が施してあつて、厂首の或
は人面を彫つたり禽獣類を彫つたりしてゐ
る。凝つた云匠のあると、船舶の形とか船中の屋
根や人物など立体的に彫刻して彩色を施してゐ
る。尚長の持用するものは裝飾が一層こゝに入

つてゐる。パイプが英国(英国)に大きく、或は鎖りのやうな
ものを羅列したりして、奴隷のグロテスクな
ヘッド、回教国の駱駝の如きものも真実に
ときどきがある。説明を見ると、烟具といふ思ふな
いわゆるものがあるが、まづ金属製のいろ〳〵の形式
がある。特殊の帯便はパイプの形式の一條件である。
西、南国のはまたなことを形着せるものと見る。
開を事とする民族は自然武器こ形とつれパイプ
があり、また新しいピースパイプ(吉和パイプ)とも
がある。また禽鳥の羽を以つて美を装飾した
ものも。裝飾民族の迷信から墳墓に形とつたパ
イプを使用する所もある。尚ほ他のいろ〳〵珍奇の

の畑具かあるなり

○外国ものを欺き客を誘致するには何事のもが
イドの品性と外語の修練とを用ひなくては、
外交修養の為めガイド学校が夫程と言つて
へばことかあるの振り返へつて横濱開港後十数
年を経た頃のことを考へると、外客の取扱ひ
のまへ後亂暴なことをしたまへた。取てがイドと
名目を附すべきものハまへが、外国の船客が上陸
して先づ第一に身を托するものハ人力車夫ひとり
だけ。こんをリクショーマンとまへた。彼等ハ外客の上
地わ案内をして乗りて勝手なる引ずり廻りても不満
の事ばかりを言つたことい云ふまでもなく、外人を待つ為め

る為めとあれば深夜でもチヤブ屋でも何でもあるの内しだ。彼等ハ
二種下等の案内者と云へばきび、思ひあたることなく、
いろ〳〵の商売を兼ねて、商売ともムニミレヨンも取つた。
日本の長い婦人の旅装をかぶりワナシて之を始終と変つ
たりしたの意とし云ふのを外客へすすめて、ツーモメせば
金を取るやうなこともあつた。此の人力車夫の間ハおのづ
から等級が造られ生じて、先輩ともいふべき奴等ハ先づ
外客の上のく権利を有し、後輩ハそれにお飯りを頂
戴した。此先輩を没収の用途といふた。此
頃の人力車夫ハひどい暴利を貪つた。日本の客を
い利が高いから彼等ハ手をしてうした。彼等の通
々金が出来て中るハチヤブ屋を任意したものあ

り、迫真の説明などを性質するやうなことは、今の様演ぜられる上のことに、重性を調べたことは、リクレヨーマンの出身が、ウかうあつて、市会議員をしたり、リクレヨーマンの出身があるところ、ガイドの創始時代とすると、殆ん説明言葉を書つた本数、迄の仲事一メンの事を及ぶべきである。

○ラジオのアナウンサンところあも実に、ころ〳〵大役である。毎日何百条人を相手にしていろ〳〵のことを設ものである。或る意味に於て耳から教育することも云く得る。その感化力は決して難小のものでない。アナウンサーの話し方の巧拙は、教化に大関係がある。アナウンサーは一面ジャーナリストの資格をもとしなければ

うこと、而一面の或る程度の文筆家であらねばならぬ、何のつけも相当の理解がなければ、人格に於て優れて居ねばならぬ。アメリカのアナウンサーの資格の内容、殊に今の木鐸たらねばならぬとあるが、実に影響者は大なるものである。細かく云くは声量が大なること、音調が清朗で無れば、言葉が正しくなければ、抑揚、抑の形容が巧妙で無ければならぬと云ふ様に、数々立ち入り際限なく注文がある。兎角アナンスも一種の芸術であるが、矢張り日人の伝で長所と短所があつて、スポルツは誰れ、儀式は誰れ、ニュースは誰れところ様々おのつから得意とする所がある。矢張り慈心の心をもつて大

切である。他人の知らぬ一室で放送するのだから、衣服をつくろはずに寝巻を着てアナウンスするひとの心の落着を自然の結果である。我放送局員はいつもアナウンサーの感心の心得のようなものであつて、アイクロフォンを前にする先からもう相手と話をする様な敬礼をするとか、衣服をつくろひ、心持ひ衣服を整へるとか、そうびをけんがいろいろ必要である。今の七夫人の報酬が少ない。彼等の給料は三千萬円も収入するのだから、モット待遇をよくしなければならぬ。米国で第一のアナウンサーハ七千弗の俸給を受けてゐるが其人の私宅の電話ハ九千回以上とふ。また赤穂浪士の放送の収入が莫大のものあり上手のアナウンサー程其の不得が多いのに赤穂を填め得るのみならず非常の収穫あるとゐが、日本にいまだ能りアナウンサーの巧拙を論じるのも趣もあるが、配役の芸を比しても其絵料も考へべきである。西洋に新刊書を売り出す時に第一の名優を宿に来つて、店頭に宣伝をさせるのに其書が別に売れるやうに変んな例もある。よく考へべき事である。

○無名浅草の観音境内にあるが、浅草寺の古碑をも検査したことがあるが、徒に拓本を得たことを

横原製

碑があるかと初めてたずねるやうな事だが、時々偶然山東京傳書簡の碑の拓本二枚を得た。表面は太田蜀山の漢文で書いた京傳の弟の京山である。他の一枚は碑陰文で和文であるが京山の書と、文化十年の筆で京傳の和時習字の師匠であった紀氏の記念として紀氏が彫り出したものである。

いま時代はあるのに、四の猴の猴翻るを見て淡み出でたる猴と思ふ。

おどけた今の節を思いたらば捻付けんと思ふ。

碑背の京傳の和文と和歌を刻したものも麿

減して読み難し、京傳の墓は田端にあり

りけせもうす

○昔の数寄者の志ある人の文故を得た。文行堂主人十二月七冊の写本を出して云く。こん度は加人の雑録

榛原製

ゆう、はうこう市を拾て得たり、加人の為めに写したるものらしい。文政年間の頃、展べて見たんだ小田島樹香（彦太郎）の四隅之略説也、毎年の業績を見くしたる各冊百枚を湯つ、市四へ出したるを集めたる、弾正忠の記録なり、二枚ほど久しく見ない。

或は、北枝のこの死後の文をたくさん書き残したるものなるべし、中を拾ひたる、

○金沙門を拾して家に持帰りて、翻刻する人多

さも雑録を業績をまとめて、徒りの俳歌

書き留めなどをして、徒りの玉尖筆の行歌

を印するものあり、版後は文墨家の仲

を印するものあり、中まれに予が寄目の書画肯

[illegible]
[illegible]
[illegible]

神龜三年丙

本朝古銅印

文日伴良私印

縦一寸二分

横一寸一分

双林舎ニ於ル道遥先生

長谷川菜作（帝展）

陶を得て桂香を（昭和を）懸ぜんと、余の衛亭に帰し
て書画文房の客と関する不少、印を以て明日
おもい」の瓷印あり、同「雲鶴」の印あり、井上の銅印二顆あ
り、「御工房」八の陶印あり、「桂香自刻」の高「可」の木印あり、
北斉の印は化中に散見、従て回主を明するものなり。
八方おもの浮情、注陶淵明像、は牧宮主人京西湖図
海を漆の山の横巻（こんりの大雅堂作の渡図）、富士又
咸京時の彩波あり其の金文も登録（ある）、江稼（横文化）の
二字款、ろくろ形あり、椿山荒浮芳翁の画面金仏
の四枠、金刻山人刻四方井香合、塗金徒図、唐物茶
箱、銅筆筒（北二号哥意の図）、黄銅茶托、茶盆、
京家刻名ある硯、黄銅唐硯、元興寺天平瓦

名縣宣印、日置中納言盛銘牛根急須、吳須の自刻印
越前白刻印三顆、徳古印（文玄秀豊和印）冊封伯弘
印、薩摩國府宣印、義淵自刻（文玄翌平原）中山信天
自刻印、詩人刻（文玄碑紅生）壽山蘭菊鈕淵の長篇
印、紀雅石雪濤印（芳井梅園市岳保山と好る）
扶桑木柳東玄圃印、青久雪庵自刻和印、梅田浪
士閑の花介風雪峯銅印、北村季吟遺印、桂香
なる家什こ悔しきもの記臨らも書きつけたこん
程物多くあり、北面龍記る物しあること面と其
ど多くは名品なる物を拓を是なるもの桂香の物
のものの今も多花しも家なり、旅程中徒を北等
文房の就て記るものあるを又こもの或うきを清

標原製

○

ものい、こゝに貼附の雪峯銅印あるこの
其の物供を惜びこゝの物ひ、金井清碑の模刻
殷家義のあり、北の抗本角人の家義殷と摺りの
と思へる、偽ものもあるしおく、

口開田半江の題畫又は往々のものを載せるものがある左の一二を掲ぐ

酒隱趙文學雪の雪傳詩傳任野山
是而後思趙若一年之中一日無之
笑而閣筆　　蕭

三伏之中一天廊之上試煎茶一盞如何

筆下江山取意成一峯未盡一峰生
是元李倚氏之句乃以為題　半江宮

花時幾度往新樹六經之
試泥裏挽釣船　松溥

三四は一二の誤ならん

半江田蕭

世界生花又入花
此余伏而探板之句　蕾已起萌於山
陽〻〻〻四二句既言盡　三四五六成只
高觀之用

半江田蕭

多年春得吉苦難後被春芽照板過
詩支稀鈍之句全濟已忘姑用為意

田蕭

海陽之岳無遠不志者實觀於余近況

半江

墨江之秀寓
買船推送春潮而禁松吳山是比中
無聲居人　田蕭文

前峯桂八之屋宴茶会

雖後江山深雪裏、上方塩鮭ト牡蠣

天保庚子三伏　浪華ヨリ田肇

○小掘遠州の心とする所は「茶意廿五徳」

とゝかゝるものゝ、茶徳を説くと一致、相通ずる法を生ずる所の具と

なるべし。之れを藉りて人と交際し、之れを藉りて書画

什器を品騰し、之れを藉りて風流の談を交換し、

之れを藉りて禮法を弘め、之れを藉りて挿花焚香

の道に通じ、之れを藉りて各不同意と通じ、之れを

藉りて詩歌俳諧に通じ、之れを藉りて閑雅の味を通じ、之れを藉りて世事の紛擾を忘る。茶道

かくの如き趣味的教育に大なる力あるしやハ人々

言ふ所を考へよ。左の原文を終す

作居而知名所
不行而知四産
不走而知女子
飽无而不厭貧
不思而進座上
節随而樂立花
不詠而咏月雪花
座童而通諸禮
有能而得知音
無友而慰閑居
年老而得友
不足而心高望
不望而交高位
不習而詩歌俳諧
席入而忘世事
不会而知佛會

不学而香道道
自身而席中清
有学而知足事
心懸而異物知事
道(ヤマミ)拳而礼儀不乱

夜清而覚睡時
働身而保長寿
不見而和漢知異域
抱拳而刻限不違

茶の徳を褒め称へんに引くも多くの人と茶を飲まるもの古来少からず、実の茶が形式と流れて人をして殺伐しもるものが多く、茶徳を修めんべき亦甚だ及ぶべきもの、保しく庶あべきは茶うまるまでも他のあるも也茶席の快適なる茶人の儀操なる道具の清潔なる作法の妙味なる。茶器を撰ぶの暇なるなる。術氣

の満々たる。甚だ世茶式の裏(ウラ)を穿る人をして吐吐を発せしむるは、不得る茶道の為まるまるべし。張り茶の本意なるべし。

○閑、雅事を楽ぶ清なる俗を離す

一 茶は茶す山吹色の清世こうる
一 皆人の集る社は神なる心の内なる神にます

一 徳本多俗校、紙本有真筆
一 酒杯説話社
一 呼呼すいよ首は抜まい大服の一茶
一 人善殺人歌、馬善殺人騎
一 酒あるる大後はいかます 獅子舞のあとなる

多心やすさよ

一語ることと人を語れば其人が語ることなるなり　かれ

この世の中

一今の世の人の門を植ることあさいしきうる

祭陽の花

一大かしの世すて人なる心ちよ永いきても孤なる

けり大宿

一紙帯殺人不用刀

一冷月無声

一春酒樽の有気時　大酔れば醒の後

一未解春酒毒、況解愛酒狂、一輕又一重、

霧也義道の

明治廿九年九月

一わが上の鏡と知りつつ又涙　一茶

一猫ら抱き乗しきい家うるあ　茶村

一あらぐちに木ふりい言いすゆ　柳の花　太宿

一自投者人巻、自巻者人損、情之得失山至容

易乎　黄氏菊和尚

一生也猫如若矜、死也還同脱袴、不以生死為

大喪可知矣　古徳

一有時奪人不奪境、有時奪境不奪人、有時

人境俱奪、有時人境俱不奪　臨済禅師

一渓声広長舌

一清風明月皆解人

一春の夜清の物言まれきけり

一とくくと煮つくる酒のうりひさぎ嗜しき者をさすることば　嘆息

○鮭の和名佐加波　鮭の本字は鯉、鮭の字を用ゆるは誤なり、鱗の字なるべし。サケの子二腔あり、腔中数千粒明透上に一紅點あり、ハラゴと云、字は鮞なり、或は加千比と云ふ、甘子と云ふ説もあり

○昨の[illegible]生命保護の系譜[illegible]を今[illegible]

[illegible]として十敵今[illegible]の十敵の他[illegible]を陳列し十敵[illegible]鎧[illegible]の[illegible]今をひくき一回[illegible]入つれ。十敵の使敵[illegible]ある金の例の如くあきらめ[illegible]後[illegible]十敵[illegible]日本国[illegible]の義術は何故重人せざる

可きやの如く、日本の精神[illegible]故[illegible]若し之れを失ふことあらば、余深く今日の吉年改来の風を心配して日本義術の重き所以を知らず、彼れ等の西洋書を見て日本書を卑しむ、彼等は西洋画を敬する如く日本書を卑しむ、彼等は西洋画を敬する如く日本書を卑しむ、彼等の寺を行けば、椅子の憑り、花瓶等西洋物を置き、客室の子弟家を相続せざる家と幾箇の寺を[illegible]

[illegible]彼等の眼[illegible]全然理解せず、彼等先代の[illegible]玩品の四見を無雑作に[illegible]如[illegible]して日本精神[illegible]の存する義術[illegible]の日を追ふて排除し

もちろん、今の日本藝術界の高尚なるものは老大の人の世の後味あるが故のみ、代をかくれば毎日毎日視さるるもの、こん次は教育不健の為すに、四粹は教くすると自然のなりたることに云ふことは今は自用なり、西洋かぶれの盛人なる今の、教くすれども何人ぞ理解を異ふるを得んと、余の憤慨措く、十歌は云へる国なる其の国民の藝術なり、日本なる世界独特の藝術なり、幸ひに今存す、世界の文化と日本国民の文化を保ち有するは唯此我邦あるのみ、何人を亡国なる教を我物神の存する藝術を教掃するを得んと、後の宮殿の事実の事の移り、十歌も宮殿をまもるとまるる唯此西洋の宮殿と同しかるも

十歌なる西洋の宮殿とあは宮殿なるも実は宮殿の業なる、彼等は唯此不業なる樹木なる禽獣をもつて使ふ宮殿をもつて足るとなる、こん充分なる宮殿を一般、其の拙の神の日を宮日するなるも、何人を藝術界と云ふを得んと、余十歌を別あん画を作る際の用意を別あ、十歌なる、宮は二画を描く待を作る教授なる、数十枚を多くことあるも、形似は成つても神髄を捉へるまでは満足するを得ずいつまでや軍鶏を画する時なん、或る地方に行き軍鶏の別あ実業まで田舎にして其神を得るつとあり、漸々と漸々心なる人なるも初めて業を下すの比なり、其の業とは下まひるの拙なるとなるよん

躍的興味を感じ、実を言へば死ぬさうを浮さるるとも、
余例の如く草稿往々にして真に迫こと、我出来上り
ぬるこの間急こと切なり真と云ふ。このあるいは何
人ぞと云ふ。十歳云く、此新作は物本等に拘泥す
るが故に、こんの勝手に、若し物ちがひもと心
を傳る深程なるきと、筆は飽まで胸臆のままを言
さいるべしと、金子の為めと感じ、西家の物本を
重さを四五くの派を感じたり。
予は此の初めて内幸町二丁目に数年家が西洋ガラス
を物語りしあるの事実を知つた。帝国ホテルは外人を
宿せしむる故を以つて日旗一の陰なし、他は北の禁制
を厳守せざるべからざるなり、北は或る西洋婦人のあが

樣原製

の時生涯のおしんがダンスを行ひ始めて数年家の
直ちに走人を去るべきなりと、東京は北の流行に倣う
北一区存するを知つて聊か慰めを見へた。
予は今日年頃四年前の事、
北海道に旅行する前、
新橋の芸者に就て語りあつた。あの人の金
が古年時代の同窓で四世太田と云ふ北人が後に世
界を旅行さるるきもの人となりうとも考慮しうつた自
分らも二三年若かいと思つたのであるが、生前に二度を
交へる様なかりきりたが若き北人の思想やこの頃が分つてある、此者時代有田の人
北が生の北の情いことも北ろ書面と語つた。書面はア
メリカ人が見て就き婦人の語る事を知るとの語る

八五米利加び[illegible]論文を[illegible]義士一婦人が[illegible]
を試みと。[illegible]義し[illegible]が[illegible]弁駁書を[illegible]
つとのを見て、その婦人がひとり敬服して[illegible]が契機[illegible]
続時することのうれしさは[illegible]が、北ローマンスは[illegible]の
物をもつて[illegible]ある。北婦人[illegible]終に一子も無く[illegible]
[illegible]他から養子をし[illegible]、其男[illegible]ことがあ[illegible]
放逐し、[illegible]家と[illegible]

十月廿六日記

○やんごとなき御方を御[illegible]と唱ふることの世の習
ひとなれど、[illegible]なる御ひめきとる詞はいとせちり
を仏[illegible]十四じ心[illegible]と少を村田[illegible]
[illegible]の孫[illegible]

ミちんの[illegible]を二[illegible]ちなふ[illegible]法前く

[illegible]

といひ[illegible]

○六月二合八の[illegible]

、何[illegible]ま[illegible]を果[illegible]苦蓮

、世の[illegible]の空[illegible]ことを[illegible]
もまさし[illegible]

右切

、咲ハちり消ハ欠る春秋の花と月とを人
の世の中

、思ハ[illegible]おもへと[illegible]を思ふを心の[illegible]の心を
りけんの後

、[illegible]なからうきをあ[illegible]をすき
この後のいま[illegible]おとろく[illegible]

昭和六年十月「古書展望」所載

古書の驚異

逗子清吾

たとへ盆と正月とが一緒にやつて來たとしても、好きな本の一册も餘計に買つて讀むなんてことの出來そうもない今日びの御時世に、しかもこの財政的な行詰りは個人の懷ばかりでなく國家の臺所にまでも及ぼし、各國のお偉い政治家や財政家達が、自國の財布の紐は締ても相手の財布は底の底まではたかせやうと、經濟會議と稱して手管の限りをつくして渡り合つてゐる時、そして世界中の注意が會議の結果や如何と開催地ロンドンへ集中されてゐる時、その會議のお膝元の他の一隅には、これ又世界中の著名な蒐集家達の鋭い神經を一齊にロンドンへと集中させるやうな事件が發生してゐた。それは例のローズベリー伯爵家の藏書賣立の入札會であつた。

會期は本年七月二日より六日までの僅か五日間であるにもかゝはらず、總賣上金額六拾貳萬參千圓也といふど偉いものであり近年にない盛會であつた。これが若しもつと景氣のよい時にでも行はれてゐたならばたしかに百萬圓位には上つてゐたらうと、或古書通が噂してゐる程あつて、物はいづれも愛書家の垂涎置く能はざるていの古抄本や稀覯書揃ひであり、いづれもレコード破りの高値に賣れてゐる。以下それ等の主なるものを拾ひあげて見よう。

この入札會での大關はなんといつても貳拾四萬六千五百圓で、世界的蒐集家ローゼンバッハ博士の手に落札した「シエークスピヤ全集の最初のフォリオ版、一六二三年發行の頗る美本」である。

この全集をせりにせつて會場内の空氣は極度に高潮して來た。が、貳拾四萬六千五百圓といふべらぼうな呼び聲がかゝつたその時、全會衆は一齊に息を呑んだ。そして競賣者が最早潮時と視て落札濟の手をふつた刹那、會場内は無氣味な程深い沈默にとざされ文字通り水を打つたやうにシンとなつた。が、次の瞬間立會人や入札參加者等の間に一齊に歡呼の聲が爆發した。これは近年にない激烈な競爭の中に、ほとんど際限なしに上つて行く數字――その息詰るやうな緊張の中から生れた素晴しい數字への歡呼の聲であると共に、又一面には文なしの素寒貧からたゝきあげたローゼンバッハ博士の肝の太さに對する感歎の聲でもあつた。

前記の價額は最近七ヶ年の間賣書史上に輝いてゐた最高記錄を突破すること拾四萬貳千圓で七年以前の入札額の二倍以上に上り、美事な熱狂相場であつたことを見ても如何に激烈な競爭であつたかゞ想像でき

る。或る消息通は「このシエークスピヤのやうな貴重書は恐らく十年二十年の間に、賣品として再び市場に姿を現すやうなことはあるまい、從つて貳拾四萬六千五百圓の數字は多分永久に殘るレコードではあるまいか」といつてゐる。

同じシエークスピヤのフォリオの汚れなしの美本であつても版數が違ふとぐつと桁が落る。第二版が參萬四千圓であり、第三版はまたさらに下つて七千五百圓であつた。

トマス・エ・ケンピス著「イミテーションオブ　クライスト」ラテン語原書初版本。この本は古來宗教的精神的の世界的名著として名聲嘖嘖たるものであり、基督教文獻の中にあつて中世紀の信仰の最も精髓を發露したものとして各國に廣く讀まれてゐる。我國にあつても三百年以前に飜譯され表題は「こんてむつす・むんじ」として京都の耶蘇會に於いて印刷されたとのことであり、我が國の文學史上特記すべき貴重なる文獻の原書である。價額は八千八百四拾圓で前記の物と共に米國行と決定した。天下の珍書貴重書でありさへすれば金にいとめをつけずに買入れる米國人相手でなければこんな高値に買える筈がない。この處古本屋に取つては米國人樣々である。

おのれ猪口才なヤンキーめ、貴重書を米國にばかりカツパラはれたのではロンドンの古本屋子の面汚しだとばかり、ロンドンの古本屋が頭張つて鼻息荒く落札したのが一六一一年發行の「初めて英譯になつた聖書」初版本で、價額壹萬五百四十圓である。此處でも經濟會議に劣らず英米兩國の代表が鎬を削つて奮戰した譯である。米國の古本屋は十七世紀の貴重書に特別力瘤を入れ、その襲落ぶりは美事なものであつた。

ニュートン著、「數學原理」ラテン語美本千六百拾五圓。

デイフオー著、「ロビンソン・クルソー」第二版一七一九年發行、貳千貳百九拾五圓。

ウイッチャリー著、詩集　一七〇四年發行初版本書入れ有り、千四百九拾六圓。

ミルトン著、「英文とラテン文の詩集」一六四五年發行、モロッコ革裝釘、貳千四十圓。

同著者、「パラダイス・ロスト」一六六七年發行、參千五百圓。

キーツ著、「エンデイミオン」初版本。これは著者が畫家レイハント氏に贈つたものであり比較的近代のものではあるが、署名入りの美本であるため値段もぐんと跳上り四萬八百圓で落札してゐる。

サンスソーシ著、「フイロソフイー」一六四五年發行、これは赤革でフランス樣式の裝釘が施されてあり表紙にポムパート夫人の家紋のある三册物であつた。貳千五百五拾圓。

○

ローズベリー伯の蒐集品中には自筆の稿本類は期待した程ではなく、案外數は少な

樣原製

古書の驚異

ドンへと集中させるやうな事件が發生してゐた。それは例のローズベリー伯爵家の藏書賣立の入札會であつた。

（一八二六年）の時の作品である。五千百圓。

○

七月二十四日には、第二回の賣立があつた。この時は先代ローズベリー侯爵の蒐集になるナポレオン皇帝の紀念品、手紙、珍書の類が主であつた。

「戀文」これは勿論一世の風雲兒ナポレオンのもので、色事師としても有名な彼が愛妻ジョセフイン宛に一七九六年の春から一八〇〇年の初夏の頃迄に書き送つた中の八枚、いとも戀情濃な惱ましきものである。

極度に高潮して來た。が、貳拾四萬六千五百圓といふべらぼうな呼び聲がかゝつたその時、全會衆は一齊に息を呑んだ。そして

かつたが、豫想外の高値を呼んだことはいづれも同樣ではあるが、次の三點の如きはその代表的なものである。

閨秀詩人ジアン　アウステン作、「スザン夫人」稿本百五十八頁、參萬五千七百圓。

ドクター　ジョンソン作、「彼の最後の祈り」この作品は彼が死去す一週間前に書いたものであつて頁數は僅かに二頁と半分しかないが、値段はなんと勿驚金五千五百貳拾五圓也である。

デイスライル作、「ビビアンクレイ」これは彼の處女作であつて年齡僅かに二十一歳これが出るや英米獨佛のアンチクリアートの問題の中心となつたことは勿論で、それに物が物だから戯合ひも凄じいものであつた。が、それ等は御想像に任せて結果だけを報告すると、最後まで英國の仲買商が頑張り七萬四千八百圓で落札した。

ナポレオンがエルバ嶋に流罪ときまつた時メリールイズ夫人に送つた最後の御別れの手紙は壹萬七千圓也、しかもこれはタッタ一枚の手紙である。書物に二三點目ぼしい物もあるが約束の枚數に達した故割愛する。

寄贈書目

◇**江戸文學研究**　山口剛著（東京麹町九段二ノ七・東京堂・四圓八十錢）

◇**セルの書**　藤岳文章譯（京都府乙訓郡向日町・文學クオタリイ社）

◇**面影**　ボクの素描　林芙美子著（東京淺草新寺町四・文學クオタリイ社）

◇**ペリカン嶋**　渡邊修三著（東京豐島雜司ヶ谷三丁目・ポン書店・五十錢）

◇**優秀燒寫集**　第1號（名古屋市中區丸太町四ノ二二・書學藝術社）

◇**日本藏票協會第一藏票集**　小塚省治編（大阪市南區大寶寺町仲之町四五・南紀藝術社・四十錢）

◇**南紀藝術**　第9號（和歌山市四番丁塚四九二八・文藝汎論社・三十錢）

◇**花鳩豆**　1號（横濱市神奈川區神奈川通九ノ三一五八鳥方・花鳩豆社・十錢）

◇**文藝汎論**　10月號（東京品川大井庚町四・文學クオタリー社・三十錢）

◇**青空**　10月號（東京淺草小島町五七・青空社・二十錢）

糞を通ぜしものなるべしとあるが、糞の色は善悪時福禍を
で善悪ありと云へば勿論なれども仮令それを信ずるも異ることなし
固より曲直福禍とは五色の屁を放つことが曲直屁
放つ色は五色であるまい。
獣数の狐狸の屁を放つは狐と鼬とである。彼の芸の之れ
を以て護身の用に供するである。特狐者は凡を狐
を見れば猟犬を放ち、狐の屁の性質犬の眼を害
して聾盲とするからである。鼬の屁は獣列の放屁
とするものである。政宋の天コンゴウ山の奥の奥は十町四方の
見物の奥の奥は十町四方の遠しこれを鼬と
奥深く一ヶ月も抜けられない、奥海の粘着性のことである。
前一度書に附言する如く火傷を受けたやうな疾

病を感ずることあり、彼れは敵を防ぐに此の屁斬
とをもつて防ぐ、猟犬は敵の屁を嗅ぎ、
まづ猟銃を用ひて一を思ひ死ぬ物ナブリ殺す
を思ふ時はめくらすセツナ屁を放つことで、それが者の間を
悪臭を帯びるから、不意に殺すべきで、人間も犬を
知つてあるが他の敵禽獣小鳥を殺らんとする不意に殺すべか
うて殺すといふ、
一すべて犬のいるかと思ふ武者屋のくさき
をもけものいつる用ふる事
一高い蕎麦いもは産の後ともすから養ず屁
はくさく香りとなる
一あなたいと屁を嗅ぐ今のまつまさ

○六郡宮沢清蔵氏ハ嘗て織坂海ハ正和元年の板
なりしなりと聞き、此の拓本多くハ下部の
文字を拓りて上部の一半、梵字と仏像を拓りたる
とて、必竟其長さ十四五尺もあるを拓し難き
が故なり、行ふ人夫の織坂海ハ帯歌のごとく
此処に拓り殆ど殆ど疲労せり、況んや南北朝時代
の七のごとく拓りたるをや、古人拓りたるが故なる事か

樣原製

金石部門に置くべきと得べし
○田を去り録書士詩人十九首拓して帳子となす
山湯、秦淑法作義一首篠崎小竹の跋あり、予の初
めて宮用する所なり、巻尾言々が清高の神韻
毛帖を彷彿たる時の色紙を拓したるなり、作とすべ
し、亦た本金石部つとに置いて可なり、
○海道往歌会上巻は和歌を書いた上田秋成の筆
なる下巻は南岳文鼎の書を和歌人数の撰定
部分版なり、此書何故か下巻のみ流布して
上巻を多く逸す、漸やく完本を得い得
なりを喜ぶ也
○西鶴置土産の江戸版が改題されて伊岸楼

ちと元禄七年 志村新七 出版さんをみるこんを馬鹿の隠居に取めしもあるが、こんもの人の見ることの出来ぬこうたとあるが、東海文庫に八〇八四一本あり。

然るに他に元禄十一年 志村新七出版さんをしるす 「くんちの図」とこれ志かあるくんも給も此がくんが又 重 「三番の江戸図」とあるこれが在刻 板ちがう為又 七九比、朝くんちの図」いつ豆生 と書の塩摺しもあるが、同一版元とある。彼岸摺の出版の故障があつたもの。

を用ひ四年後に 山陽 出版しのびのうへのうとこと とがある。

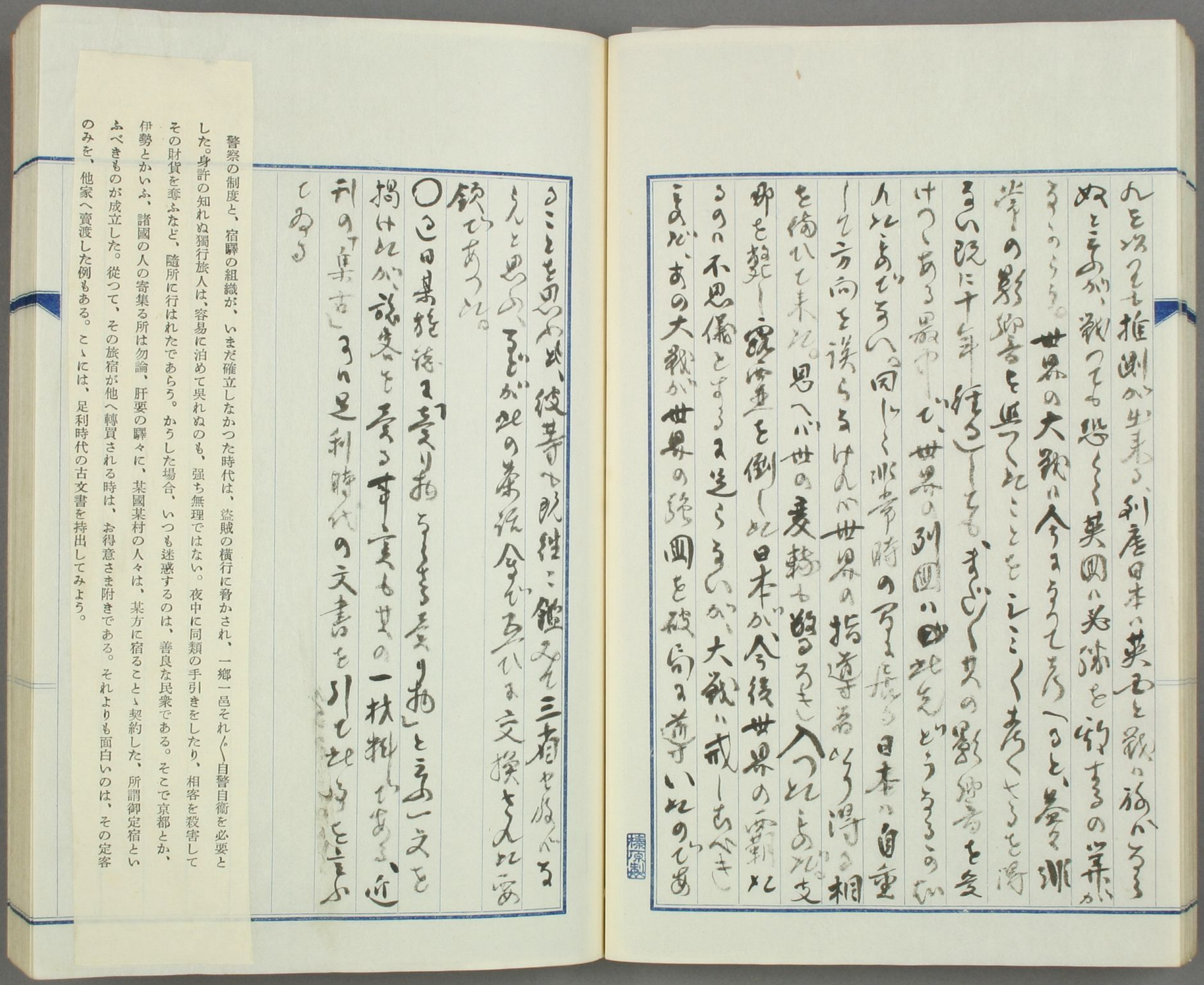
○他の祝詞の義又（寶会記）を左のおす

数多原仁 蓮留米 蓮龍給比天 腹張止身
志呂伎仁 身志呂伎給比天 取伎津志仁 取伎
津志給比天 御井戸之風乃天戸障子 於喉
抑事 如久 如此 放給天者 今日以降 芋止云
芋買 銭止云銭者 不有者 共登 抑申 清申
事於 八百萬乃志物屋仁 平久 安久 聞召申
須。

○四年前文政の頃今の日印時間問題を中心として
英仏露伊 任意の種々英国の内情を伴し合つた。
英国も 戦後全く困りはつてゐる 或る識者 英国
へ三十年後に亡びるとも知れぬとく云
はるが、一時世界を席巻したやうなあの国がどう

許さらるべきやうなのは無いと云ふ事であるから、
獨乙が敗北で三國でもって露西亞が敗北やまた
墺洪の王室も滅亡に成、元老等を考へると英
國がまだ殘喘を保つてゐるのは寧ろ不思議とも云へる
の外、英國の下り坂とも云へる。實に前途
ちとも新と見ても、あと下り坂である。全体が保守の
國であるが、その保守が今の工業を初めとして、機械工業
ハ追々衰廢する折きつてあるから日本ともあ及ばない
英國が世界に有しもある大なる殖民地を追々獨
立せんとしつてあるも、英等が一個く投票の權
を有し獨立を主張國もかいつてゐるが、愛蘭を主張
始めとして多い英國を本国と思つてゐるもの
ばかりと云ふ

と英國に反抗せんとしつてあるから實の味方ばかりと云ふ今
日英國の失業者は三百萬人を數へる。是に扶助料
を與へる事金額の十億と云ふ巨額である。カナダ
なども其の戰許にやつて居働き就かせていと折角が
外へ移しても ナマケこの外から先方も御免と
マケこの失業者界で狀態を受けてゐる方が樂
と本國に帰つてゐると云ふ仕末で十億の救濟費がいく
ら足りても癒ないとある。あと裏面の徴かなる英國色
除アとり出しれ日本に對抗し不安の樣子を云つてゐる。
日本の關係は一層悪化を導かんが四十年前四十億の
綿を買つてやつたのが日本が其を翻訳して
馬鹿にした重稅を課し此に英国の悲運い



警察の制度と、宿驛の組織が、いまだ確立しなかつた時代は、盜賊の横行に脅かされ、一鄕一邑それ〴〵自警自衛を必要とした。身許の知れぬ獨行旅人は、容易に泊めて呉れぬのも、强ち無理ではない。夜中に同類の手引きをしたり、相客を殺害してその財貨を奪ふなど、隨所に行はれたであらう。かうした場合、いつも迷惑するのは、善良な民衆である。そこで京都とか、伊勢とかいふ、諸國の人の寄集る所は勿論、肝要の驛々に、某國某村の人々は、某方に宿ることゝ契約した、所謂御定宿といふべきものが成立した。從つて、その旅宿が他へ轉買される時は、お得意さま附きである。それよりも面白いのは、その定客のみを、他家へ賣渡した例もある。こゝには、足利時代の古文書を持出してみよう。

永代うり渡申道者之事

合　伍　貫　文　此ちうもんのほかに近江の國より我等迄御たづねの方候はゞ貴方へ御ちきやうあるべし　若松

右件の道者之さい所あふみの國つち田の里かうともに一ゑんきうようあるによつて直錢伍貫文に大ぬしや宗左衛門どのへ長うり申候所實正明白也天下たいほうの地おこし行候共於此道者はいほひあるまじき物也仍而うりけん狀如件

永正八年かのとのひつし拾月六日　うりぬしけはしよ　若松（花押）　口入　田中太郎二郎

一つち田殿一家一ゑん　一太郎左衛門殿　一まん五郎殿　一まこ三郎殿　一中道殿

一九郎ひやう衛殿　一二郎左衛門殿　一一郎ひやう殿　一中ひかし殿　一與二郎殿

一□□へもん殿　一とう大殿　一三郎兵衛殿　一とうしんの坊　一ふるてら殿

たいりやくしるし申候　一いゑかげ百五十許あり

昔一人旅のこゝろを宿泊もしめすことがある。そんかの物語るごとく八田人が、六部の笈を「同行二人」と書いたのを一人ひとりのことを標標し給の処と考へるがいかさまと思ふ。

○近日の田人と共のまる関西観音寺の字陀郡の

大門寺　摩崖大石像をそんとする金をもつてあり。

其の彫像は誠を得人と、西村貞著「南都石仏史」を渡人と云ひ其の大愛を知ることを得た。

名張街道を北どること、約十里のところに三本松村大字大門の村がある。大門寺はその村の字陀川岸と書いてある。名高い磨崖仏の寺の彫岸は時主と伝へる人、長大罪崖と云ふ。

大罪崖は高さ十尺、横巾十尺あり、石像の向て左の方に、薬師如来勝曼陀羅が陰刻してある。

仏像彫刻薬師は右手を施無畏印に、伝ひ左手を展臂印に結んで、ふみわり蓮台を踏んで立

つ係谷に実に雄大荘重を極めてゐる。

三浦梅園寛延三年の作（東京）芳谷に宿雲谷を

惜めて山路蒼茫たり、山をこして一の寺あり慈草院

大明寺と云春日の北に岩山丈四寸の観勒堂を

見あり、川を隔てて向ふ三つと云へ、本長立丈の

芙蓉の如いに「其仏の長五丈あまり有と云、山元の

上つ方は、猶あまりも高くなりて、と述べてあるが、石

像の大きさは、丈四寸は、ちと、いつの皆丈とも信ず

サ四丈五尺あまりとも、仏身の丈けは約三十八尺ひあ

る。「奈良名史跡補考」の載せる所の本四冊すい粉の

ちゝ寸法を載せてゐる。

背光彫込絵高さ　四十五尺五寸

背光中央高さ　十四尺一寸

地盤から頂上まで高さ　十一尺五寸

唐巾　十尺

自頂上至鼻　六尺二寸八分

面部伝巾　三尺七寸五分

左方目長　一尺七分

右方目長　六寸六分

鼻根巾　八寸四分

口伝長　九寸八分

唇長　八寸二分

耳長　二尺五寸八分

蓮華伝巾　一丈一尺二寸五分

北石像の土御門天皇の御宇後鳥羽上皇の叡願
により法勝大僧正雅縁が棟梁となって造立し
たもの、承元元年十月から翌同上人地鎮
同月二十五日首尾して承元二年九月
二十日ようやく頭光を彫りはじめ、ついで
二十二日より十月二日の間に九ケ月の間な
この霊像を刻成したことである
承久三年三月七日後鳥羽上皇は御幸
あって開眼の式を挙げられた。彫刻がどこ
かのあるであろうと、大正五年研究の結果
胸部及腹部に答三寸弱の円形の凹欠

標原製

のあるを発見し、これを抜き出してみると検
したところ、果して内部に小巻子
の納入された形跡を認めたので、手を解き
と抜こうとしたところ、
奥禅寺剖南法師」雅縁大僧正の願下の記を抜くと北石
像の宝冠の石像を手本としたものであ
冠の石像の元弘の兵火で焼け損じた
ことを考えると、高北の石像の造者は新たに宋国から
渡来の石工が造化人であったと云われる、北沢の渡来宋
人の陳和卿と共者の陳作壽の世話共者がむしろ
みる外、其他石工が伊行末と云うのが四天人のものを在

れを来朝したものゝ、北石工の名のまゝ残すべきものと
が、多分北等石工の心ではあるまいかと思ふて、北等の石
工は皆日本を吸化し、大寺石の造る行ふ手を下したと
多実は一つとして造らない。大仏寺の廃滅佛のごとき
固めれば心也、其の手法の大抵的であることから見
ると、分るとして日本人の心とは思はれない。

こゝ一三伏茶毘の日、閑に任せ、折々簡の閑業
を余れば雑務を云ひ出しも墨換する折柄、先
日渋谷氏等の書面を手に、雑務の数々を

横原製

を見て、一冊の隠業を刊行せんと結遂
せらる。余云く、余は余の仕事を離れ自分の
閑なり、志未完陰を拾めるも、疎懶の性、書を読
むを好まず、赤化主義の研究をも力を注
ぐ事も出来ない。時々無聊の用人ぶり、漫然
業を駆り、無用の書を書き散すことが習
癖となれば、毎月雑務累積、分論人
の二冊ものとなるのみ、唯自慰のまさみる
迷きないから、積もり積もって足るやうなれば殊に
分別者時は富つて紙と世の文を発命、斯の
無用の閑業を刻する心がけもあるとまを
庄司氏云く、世の無用之用」と云ふことあり、

書下の無用とするものと■様に之れを流して世間
とするのが本著の業である、願くは君が為すべ
き業なり、予思へらく、世は予と同じく元流
を惜しみ、二六時中汽車や電車にあ
ひ時間を徒■する人も少からざるべし、斯■
事業に青ふ人の後進の時が恰かも■予が無駄
書もし此時と日相ひもあるから、なんぞ因なれ
無用の書を排斥の一助とし薦めるも敢て不
可なきを似たりと、氏の慫慂■に従ふ事四
移を数■現し■更に幾十の者の影響を深
へ、編次其他一切を氏に委したのみ、此の随筆
である。書名を小物屋とするは余の書者の

横原製

名である、随筆の本意は時物を
録くは予の甚だ恥る所である。若し夫れ余の
随筆観は其頃の掲げ来れる如く、なんぞ
随筆の病をもつべきか、言は物の発かるを恥
や酬をさらけ出すことあるを、賢者の憤人
で為さるる所である。吾人の之れを敢てす
るのは鳥滸の業ではあるが、賢者でなへかる
べし、と許し給へ。

○石仏巡礼の内高遠志に伝ふる所の閑と乗じて一
二の事実を掲げる、其頃寺の仏迹跡はめるあ
であるが、佛説を掲ずと雖も如来は三十二相のめ

七宝で造られた千幅輪、蓮華、魚鼓、金剛杵、梵王頂、衆蓋などの不動明王を表わし、これを
ろくろんの千枝極楽の四隅を清浄する四隅
あると云いたるなり。えい唐代、玄奘が西域より
将来せるものを、追々転写し、日本のハ大寺四寺
の南のものと云ふ、こんろんの石を敷文かも
つて、其間宮に天平勝宝四年、知の勢王を極
主として書師、紙田安方の筆写を傳う。法四
女王の死後の冥福を祈る為めと造立されな
ルと云ふ、書の傳の石の刻者の名も浸滅し
濤めるへが佛造石の面左右と刻さんに金剛力士
の掛字の能用ることを不ること、あ方と云ふ西の

橋原製

の投価の値段秀ルこのもなる。北の石にもと藥の寺
の西なる薬市の池に埋んであるものを、宮内の末
に掘出したのと云ふ、全体こんの無縁寺のあいあ
つたのを、興福寺の方寺制、年時代に藥の寺が
押収したのと云ふなるべし。西の石の傍らに立つて
ある佛跡の印法及び呵嗅生死の和歌を刻した
佛道跡石歌碑も柏原木村田宮の小溝に架した橋
の板石となるべきものを近世発見されたのと云ふ。
○ことしが印聖方芳生(大師遺)記の頃後
百年目、南なるのも、都八の印人(八貴)仙を陳
列し且つ祭典なども行いんとするの服部耕石が
諸八等なる貴の廃物を喝やきん且つ春岳の生

陳を依頼されたのが嬉しかつた。家系の芙蓉心を僅かな七顆あるうち、家祖の印倉春二翁の花押記（黄銅印）田光吳の西湖釣叟の印外四顆の雅印である。此の印譜さいは江雲印影二冊、芙蓉自筆自注漢印双帳あるうち、口伝代の雷雨推天雅の印も出陳すべしと語られ、若和一馬の印跡影幡寿の印、家傳ちゑ仲絵つの印三顆を出すことゝなる。

○月光漫画の墨画記が三四出陳されてゐる。南十五郎、茅根、京成から五郎の三冊が手に入つた。これは寿雨とふ人の著書、帳子面と寸法の冬図（？）詞書も加はつてゐるが可なりおもしろい出来栄（？）

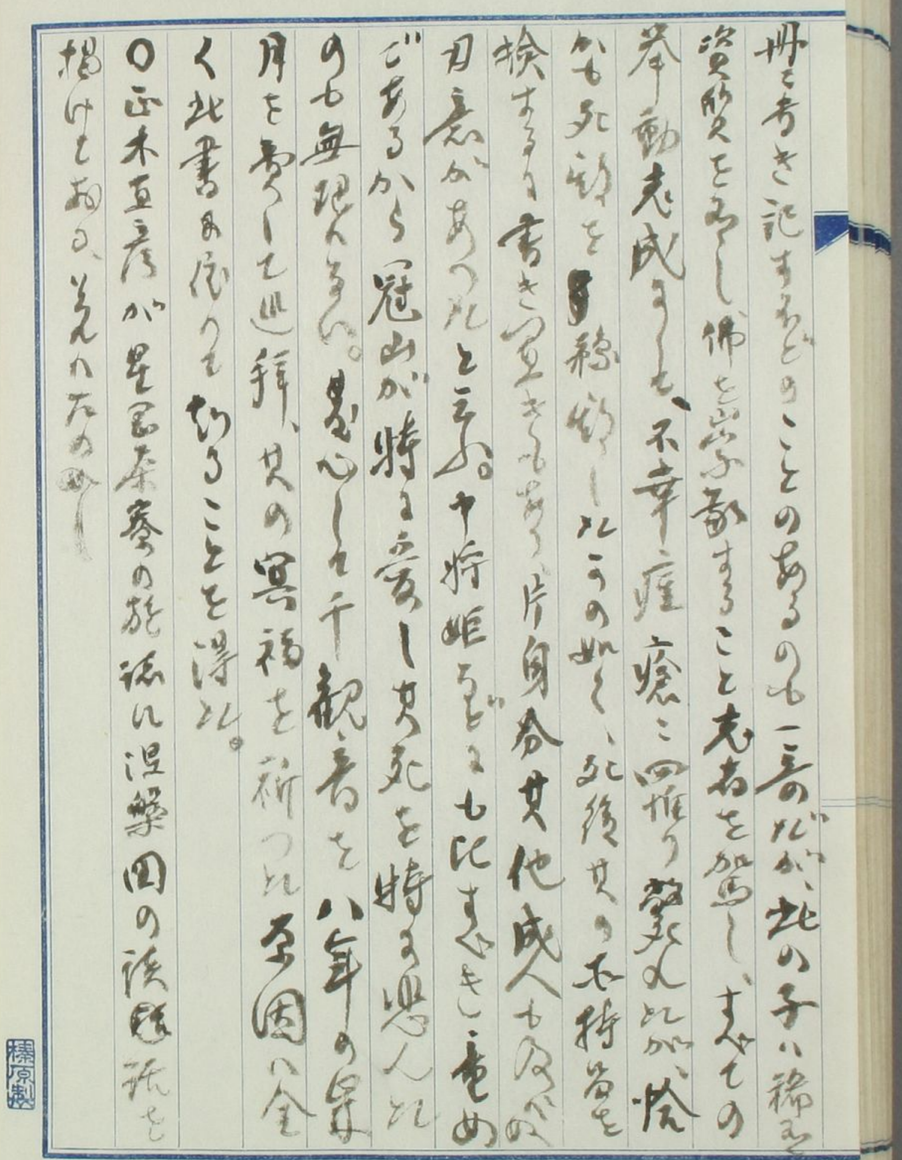
標原製

まぬ。人びと絵をかきはじめこゝろもあるが北の漫画は芙蓉に優るこの興味がある。絵をかきなぐる人の旅中常用のものを手帳にスケッチを取るのがおもしろいまさみび、茎葉も美し絵の心得があらば学ぶべきことびあるが、芙蓉の絵は如何ゆるに代つてスケッチを供給するのは北の漫画寿雨記ひのあるを云へやう、漫画とは俳味があつて俳書の挿絵の漫画とんびろけんびらぬを調和するが、この意味を拾ひ、自分の上の秋成の海鳥狂歌合を愛玩してゐる。この青い一冊が秋成自筆の狂歌で、他の一冊に南畝と文屋の絵が添いつてゐるが、南畝手の漫画まいろ〳〵の仮版がある。

○北斎、絵つれ及びの内に本因坊丈和の許状が一通ある。

素所行狀の標本とまくきである。尾崎紅葉が九つを九華
と号せられ同じく東福寺の句碑などは二十枚ばかりの中の姓名
の出が脱部を露わしに紅葉が書いた「三夜の月」などは何とも
く懐かし味がある。尾崎行雄が書いたものも実に立派
同じく二十枚ばかり夫人と婚約のことが記してある。柴田是
真の法名書（一通）皇室の愛顧地位が主流を為す
である。柴田の下に印が捺してある。皇室の御愛顧の
寺院といふのもおかしいことだ。まあの梅園の主人公
者以の書簡、これは後年多く寺院を集めた時も得
るところの人物インチキ陳列の材料である。
○茶道の日本と茶を移植した始祖と云はれてゐる
が其著喫茶養生記といふのである。時は後鳥羽

代の時の出世実朝と茶とは最も親しかった
際ひとしく右府と悩んだ実朝の試みと茶
を喫すると酔が忽ち解けたのだ。ひどく喜び茶の
栽培を奨励したのだ。興茶の風が鷹司行家
などと、ある旅行と書かれてあるが、実朝宿願
のまゝに行かれ典拠があるか知れぬ。しかし考へる
○松平冠山が信濃の大名であるのに観音寺を
参詣して当時信仰の評判を博したとあるが実
は愛吟を与へた芸妓の名であるとの意味
児は誰であるか、露と名くる意味であつた。北の
童曲の行狀と就て玉露亭の行狀とあり一
冊の本が刻されてゐる。七八冊の意味の行狀を一



いぢり

今日(八月二十七日)護國寺に釋迦涅槃像の展觀をやつてゐる。素晴しく大きなもので、幅五間、長さ十三間半といふ大ものである。

護國寺では三十年もつと以前に一度これを展觀した事がある。それ以來展觀を止めてゐるのは、他に事情があつたからだ。この大きな軸物を展觀の爲めには態々背の高い小屋掛をしなくてはならない。これができない爲めに展觀は十數年停止されて居つた。

其後新潟に博覽會があつて其方へ借取られて行つた事がある。見世物に晒されてオマケに博覽會期中、大暴風に出會つた。小屋は雨濡れに逢つて涅槃像は皺苦茶になつた。それをほしかためて東京に持つて歸つた。軸もその時三つに切つて繪も其通り縦に三つに折つて、疊んで持つて戻つた。今度それを修復して、一般に展觀する事になつた。裏に何か書いてあるが、修復殿は炎上した。不要になつたのを松平左京亮といふ大名から護國寺へ奉納されたものらしい。仲々いゝ出來のもので關東にはまた珍しい佛畫の一つとして人に知られていゝものだと思ふ。

東福寺にも大きな涅槃像がある。護國寺の涅槃像と其の大きさを競ふものであらう。次には藥師寺に淨土宗の古刹の畫いたこれ所大きな涅槃像があつた。上總の六夜寺といふのに縫取りの涅槃像がある、菱川師宣の書いたものだと云ひ傳へる。恰度今が見頃で、紅糸紫糸の色の調子は恰度いゝ時代が經つて、繪具にまさる色彩を見せてゐる。師宣は房州保田の縫取屋の息子だつた。六夜寺は房州鋸山を越えて保田から二里位の所にある。師宣がそこに行つて、書いたものらしい。その圖の下に金泥で菱川家一門の[illegible]

生涯で廣田君と結び、壺中居の店をあれだけに仕立て上げた。それだけで無くあの男は一種の陶界の人物だつたと思ふ。

私が正直に西山君に敎へられる所多かつたが故に、彼を過大視するので無く、公平に言つて陶界、大家先生と言はれる程の人[illegible]

今日（八月二十七日）護國寺に釋迦涅槃像の展觀をやつてゐる。素晴しく大きなもので、幅五間、長さ十三間半といふ大ものである。

護國寺では三十年もつと以前に一度これを展觀した事がある。それ以來展觀を止めてゐるのは、他に事情があつたからだ。この大きな軸物を展觀の爲めには悠々背の高い小屋掛をしなくてはならない。これができない爲めに展觀は十數年停止されて居つた。

其後新潟に博覽會があつて其方へ借取られて行つた事がある。見世物に晒されてオマケに博覽會期中、大暴風（あら）に出會つた。小屋は雨濡れに逢つて涅槃像は皺苦茶になつた。それをほしかためて東京に持つて歸つた。軸もその時三つに切つて繪も其通り縱に三つに折つて、疊んで持つて戻つた。今度それを修復して、一般に展觀する事になつた。裏に何か書いてあるが、修復した紙が方々に貼つてあつたりして意味が分りにくい。その中からちらほら分る部分を拾ひ上げるとと洛東大佛殿涅槃像と讀める。洛東大佛殿は京都の方廣寺の事かと思ふ。それから享保の頃に玉樂の五代の孫狩野胤信と讀める。

一日廣間に展觀して幅五間のものを、長さ三間よりの場所をとつて見せる事が出來ない。今日は恰度三日目で佛涅槃の所が出てゐる。墨繪で其表具がしてある。表具には淡彩を用ゐてゐる。

寺傳によれば、京都の大佛殿の壁畫として畫かれたものだといふ。所が出來上つた時に大佛殿は炎上した。不要になつたのを松平左京亮とかいふ大名から護國寺へ奉納されたものらしい。仲々いゝ出來のもので關東にはまた珍しい佛畫の一つとして人に知られていゝものだと思ふ。

東福寺にも大きな涅槃像がある。護國寺の涅槃像と其の大きさを競ふものであらう。次には藥師寺に淨土宗の古刹の畫いたこれ所大きな涅槃像があつた。上總の六夜寺といふのに縫取りの涅槃像がある、菱川師宣の書いたものだと云ひ傳へる。恰度今が見頃で、紅糸紫糸の色の調子は恰度いゝ時代が經つて、繪具にまさる色彩を見せてゐる。師宣は房州保田の縫取屋の息子だつた。六夜寺は房州鋸山を越えて保田から二里位の所にある。師宣がそこに行つて、書いたものらしい。その圖の下に金泥で菱川家一門の人の法名が書並べてあつた。

藤原時代の佛涅槃像には高野山の應德三年の銘のあるものが一番古いものではないかと思ふ。山城長法寺の金棺出現圖これも古い一種の佛涅槃像と稱してよからう。佛涅槃後日譚とも見るべき圖柄から云つても興味深い佛畫である。次に新藥師寺の佛涅槃像がある。鎌倉時代のものである。剝落は酷いが涅槃像中の逸品である事は云ふをまたない。佛畫としては涅槃像は面白い圖柄で今後の佛畫家が、此方面に新しい開拓をやつて行つたらよからうと思ふ。

○癌と云ふ病は既る古るい時代からあると云ふて、ミイラ
などを検べてみると此病痕がある。古るく羅
甸語の病名は「蟹」と云ふ事である。病巣が蟹の手の
如く四方に張ることも形容した迄と云ふ。恐らく
此病氣であることは其名でも推せる。而して其病因
に就ては古来いろいろの説があるが、漸や
く近年に成り刺激が此病を生ずると
云ふことを実験を徴して断ずるに成った。
本邪も此種疾患を検する常に
の事であるが、女人は自免
して五十歳を過ぎて癌が明かに生じたと云ふこと
がある。全体刺激説は理論として或る学者の唱

へられた事実であるとを主張したのいらんが初めである。
但し●従来癌患者を検する常に
聊部と云ふ事実は聊部に癌を生じ常に
問題となる事は手を当てると云ふ事である。手を当てると此病毒の生ず
ることは医家の経験のつもり居る事である。婦人の癌
が多く乳に生ずるのは乳を吸ひ刺激を與へ
るからであるから、赤子宮癌の婦人に多いのも此病
不が交接●刺激するからであらう。婦人の他の病不
二生ずることが(甲)稀んで此二ケ所に多いと云ひ
べし男女●共若い年輩に多い事は此病に先駆する
ると考へるが例であるが、後者は飲食物の関係があって
美作家に多いと云ふんとある。

○近来新聞や小説などの北叟笑む、と云ふ字が盛
りに仕用せらるゝ、誰れが仕出し初めたのか、貴人の云ふ言葉
に成り、世間に用ひられることがあるかも知らぬ。実は北
叟は人の名で北の老人のやうな人が笑ふと云ふ支那の
故事である。漢文の先人ひあ
へば時代ちがひ、北叟笑などと言葉が仕用せられ
たまに不思議はないが、今時北叟の故事も無ぜず
忘れられて用へてあるのは面白いと思ひます。
○文久元年(十一月八日)一枚の古文書を得たり、文久元年
正月廿日杉前志摩守殿より典侍殿へ人と互
換高買を禁じ、又志摩守殿へ無為酒酒高買を
禁じ、ちやまことも杉前しもあるべし、其文左の如し

定

一自今杉前へ出入之者共者志摩守不相断而
勝手に立入商売仕候儀の為曲事事
一志摩殿手代無為而今酒酒高買仕候者
有之候ハヽ言上事

附り、其儀に付何方へ往りとも一切表沙汰
一若表仕候合申聞者堅停止事
右条々若相違之輩者可為科者也
仍如件

文久元年正月廿七日 星印

杉前志摩守殿

こんなこの貿易史料中重要の材料也、黄ち九年
一月の家康が征夷大将軍を任ぜられ次年也 山田氏
説が選羅の商売とする説も此年也

○日本語と西洋語と対するこの困難なる問題は
言葉もなく、誤解の結果の生ずること往々あり、今の世界の列国が日本
を好戦国とみるかこれ日本を解せざる
悪評の為の事なり、日本は戦争好きの長所は
あれども決して戦を好む国ではない。戦争を
歴史的研究するものは武士時代の事なり
を変ずる四ヶ国あり、これを忘れ戦争を云ふ事は日本
を誣へるものなるが実のこれあるかこれも誤解の結果なり

標原製

なる相違なるべし、即ち尚武とかどの研究をなす
ものなれば武士道の研究と尚武は異
なり、武士道は日本の文明を陶冶したる
つのものにして事実なれども、武士道と云ふ武士道
の武は天子に対して意味の武士道と云ふ
るものを指とする意味の武士道を重人とせんと云ふ
もしくは戦を奨励するものなり、いと同じやうな武を
尚ぶとかの武士道の武は
ことに言わまもるべし。
(書道)亜細亜の国は武を尚ぶとの事なり日本は文武
も兼ねたるものなり、尚武の二字
の意味もくるのは何の意味なるやを

日本に幸ひして西道英人せんとする所は日本の俗さかあるの比、必ず支那武士の教と禪とは同じ根から、外国の誤解や邪推を招き往々迷惑を日常ちゃうひある。禪宗の苟もめさすのうきふことはんを信ずるかひあるがさて武士と何んと禪まべきやは俗説の難題である、支那人の八つまん禪宗の今日もちへひあらうと日本の天子と禪師で王ハペロハ日の字をあてるが真こんを支持と実践論ずるとも、アテハメん事か不可ひある。

また、支那武士の数似の中を信ずることが交禪を於ては出を得ずとさんもあるが、ハ八の禪ハつまん禪師の言ハ宗の哲学を用ゐることが安南ひあらう。

○仏生の夜伸で杉木寅の「禪」と題する書を猶ひ出ある。さて「北」の書と曰し為ありあるが、実の七月のうめ、ひ茅舎の説と見るべきこと。自分の思案からも七月橋拙しもあるが、春城随筆のある「大八洲雅談」の書名もあるが、こんな宝の自分の随筆ひ所引の事を和時代の文に指載したのを、後度新しくへもかから、堀蘭山の名ひ出ひ引しの所、唐ハ市の随筆ひあることがうつもある宝政記書名の古名雅談とあるのハ今古雅談の誤りひある。

北市ハ三田村鳶魚の序ハ代へも禪を閲まいろくすこと、とか載せたりうと、初めを知ることが二三ある、左さ大変を明記する

「脇ふん」の発生

川柳に元禄の生れふんどしあごでもあり（明和）

ちゑをうる男ふんどしあごでソ（寛政）とあり

新くてい脇ふんが元禄に創世せしものらしくも見

也、俗語いかりづる（元禄十六年版）に

用ひ来けるく

おとがいはふんどしをかく序数手

とあり、今びもふんどしをかくるゐ脇で一端を抑へしることを

意のごとし

重人が「ふんどし」を無しれこともあり事実なれ、晒木綿八百文と

きこえふん長今なりしとあり、ふんどし信を寄り五遍洗ある

八幡の後に湯殿をもふんどしとあ

標原製

書しの公人の世中ふが得あるも史わもドに級者

の級を深めるを縦いせれことあるる

文政決を行ふふんどしのつき何を立てたことがあるまこと

第一

書面し通取極等も無之ふれ 士分のもの白羽二重

白絹白木綿お用ふ代るべく存じ 色紋等の者

左用ひ儀の撰持ひ仮頭くく

士并所人百姓病死行倒異変の時下帯無之

候ものを城、差別何ひて御用れ

書面下帯無之候中 別で元封方者之写表儀

こまるる

前表八士分こつき様表の宿場の場合と第

しての指令をとゝく行
元禄十四年時の年(月日)依討の文の中を大役の[illegible]
さまを描き行る中をひいりめんの面衣を鉦の音しもつ
けたることもあり
敢て時代を敢て稼きとまかあり死体ともあるとも
ハキえり、ゑんどしまれか遺をもうけたるとい[illegible]
以上い為為のあるしる大安也、尚二三此書の内ともの出す
田舎をのたるきを多敢り、今も唐物の人い神をい
あさぎとしあれあさきハ平塞き也手あさきハ代りる
熟をて隠すことをろうが神也
鬼の面を角の度の神を配するい長法眼之位ともあ
ると牛馬問をえれ、和仏比丘尼の問を鬼打と称し

榛原製

人々ゑをて踊く、是ゑんを義物しを牛の頭まハ此ども、脇
より下角をかんどる、えんが角しの持ちるが追を勢祇
して鬼と角の度の神也
さ
都を一氏云く地獄を焼ちるも神罰ひを義死とゑんとし
やはつせる。
ゑんどしるえ往々の異名あり、武是家の衣冠の内の手
猛とあるゑんけしをを馬の手猛。思ふ可ら形、前ゝ敢猛
稼が死人のゑんどしる塗ちることを奉けしが、手実さ
ることあるしるえ、六士の関ともも法中婦婦をす
るのゑ[illegible]けしまの何物も元り上けるえ、えんどしまい
[illegible]離さ稼ハるるもぬとしもるつ此ひ[illegible]るるから死

体からんどーを奪ひ自家用としても解脱かつくそんな心ある武士は死後既きさまを奪ふことを禁ずる。

のんどーを着けたものあらうから、その品の貴きまた惜んで奪ひ去りたるものあらん。隠分武士の中ときを

御子金剛鈴鈴などのんどーを着けたものあり。死後その者の身分のある日右びあることがないとそ

の証もあるから、のんどーを一概に貴きものとも考へ（なほ死ぬる、苦しの迷ひの大家の遺ふく、現場の武士

の死体の神のうきは盗まれのうまあるが、おのつから

ら離脱しうるうん、神の体の附き長るは体力の振

つのと、死して或る時分を経ますんが肉も腐るから堅

強はいるべきじうへ、おのつから離脱するの理あり

と、武士はまた素ふも神の紐を肩に結び離脱を

防ぐ工夫をなすことをもあるのである。

支那の犢鼻褌を日本の男のあんどーと解し伝へ実

は北の褌は袴のやうなものと日本のとは同じからぬ袴の

更くるものもあるの。日本ひも東北地方は男女

如きこのを穿くを芳心を経るまま、美は犢鼻褌のみ

き短かいものもあるも乃ぶまであつても、のんど

しといまへ。其の袴の中なる男女共帯をつけ長

ろうんど、こんも実は一種の褌腰巻である。偶にマ少

しヤレの方式のあるのは、ちんを解こ肩へ交接かを来

るへから其意味を解するまいしたるを、云つて

股のやうなものである。女子のあんどーは木綿二幅を

絶ひ列論にまでも毒と程かく膝行する達するか生じせぬ
うであるかいつぢか考へ出し一案ハ裏つきすし
長い膳と塗ふまが出来ぬ。えんが祖父のそれ外出の
時度をひつかくけて出るくやうなそれ。えんを連出し
とふ。ある膳屋でもそふして。ある茶屋家い者し
の仰慢の脚部まで。絹の脚胖を塗ふことが
熱化してこの夫人のとふてみるか。えの家か
いうるかけるが。兎角ものもじは人を見らしを取る
ふから。田舞出しやマリレヤレの工夫さるいるの
の成行とふべきひあるる。
禅の後法とも思ひ出るまを漫るを書きつく
一 紫禅ハ〻〻雪を持す

一 六人の禅長とふ美を物を暮ふ為を用ある
一 禅中の風の天地の大をいふ
一 仏守を手拭と称ふ浴中後ふ。ある
一 理解を国古ハ流来ニ禅の妻妻あること
一 威容の人を野一隠墓を云ふと志基所口(図)
つて共島妻のあ人びしの振り云ふと見よ
一 男禅ハ往々貴童を隠す(図)を利用さる
一 女禅を次世古妻態性新家あり
一 九十九の女禅を次の八博ふ。五ス法位家
一 男子初めて禅を着ふ祝をしに寺もあり
一 レンドゲンを見物ふ。遠の八鉛の膳屋をする
一 天の岩戸に膳屋を去つて踊つれめ神もある

一 大連の大工達は後ろ上衣うハ一丈七尺と着けぬ者働
者が居る
一 赤色の褌と男子が着ける時代もある
一 恐るべきい庫の後の褌ひらく緋ジリメしの事
一 已んの男女と姉妹の褌と交換と欲しれ
人七ある
一 女褌ハ日本の家風と同じく吹き抜ひある
一 女褌ハ時々それハ貞操帯ともなる
一 相撲の化粧廻しハ美美敷出しの上ニ出ず
一 俥夫褌ハ三七ハ角帽の手ハ半ハ減ず
一 後ろハ前掛の紀の皐方手ぬ
一 男女の褌と後ハ神ニ祈願する上の風

横原製

男もある
一 小娘子ハ三〜まで裸ぐらを表ハ出る縁ありぬ
一 家族を褌とする人ハ表褌中ニ入ることハ割合ハ
少ハことなり
一 汚織の女褌を頼ハ搭ハ風邪ハ流ぬとの迷信ある
一 大阪ひハ近火の節ハ風ニ上り女褌を振ハ消防ある
一 岩田帯ハ男褌と用ひよと云ハ俗信ある
一 産児ハ家初女褌ハ包めハ他人ニ音ハ
一 若し墨汁ニ搾ハ産ハ切立ての褌を入るを俗
説の誇りとし
一 識を誠ハ七人の敵ある清潔の褌を求めよと云
七江ニ説ある

一 今の男女裸体とする体を考へし昔こ倣ふて裸体を法
度せよ

一 潛然たる国の中に医師の日が陰部の癒者を對し男裸
の一端を拾遺 国がある恐豚に擬し此

一 自の六人禅を以てみるこの世界中邦人ある外
自分の古風なる人が様又の婦ひに、微中も婦ひに、どこ
まで也人主義なれ、美ひ無いとうるに、の毛まで、かゝ
るへ。俗やちりめんを試み給ひしことあるが共さまるこ
木綿がなるこ。い。但し清潔を期するから、毎の替
へることが例とするこ。旅のこもハンケンチと
同様の禅を行ふこつめるのが例である。男女の六人

の禅のなる女用の腰巻を夏冬せし繻子にみる。
男子ズボン下をと家のことあるが、これを
廃しもから夏は支那手りメン冬はフラン子んの腰
巻を用へとなる、禅は手拭と似たやうなものある、手
拭に就ては一文を草したことがある、禅と就ては
一度も試ちべきこと

十一月十日記

○自分の狂詩を紙味を紙しこと、実はうまいの
がナンこへうらば、左の銅脈の狂詩の蜀山を慶す
るの歌がある

鈴麻多雲明、山中恭爽催、輪来宮禁人
火、敬成胡麻灰
然白なるこ

○川柳に曰く、世を感ずるの句、左の如き七丈一句にあるべし、之れを古本市場に出さば、完本にあらざる故を以つて少数の價を附することも無ん、自分の之れを遺域とすると、手傷と迄年多家の写本を蒐集しつゝあるに、少数の写本にして日都に入る可き利益得

風鈴の下に一文世をのがれ

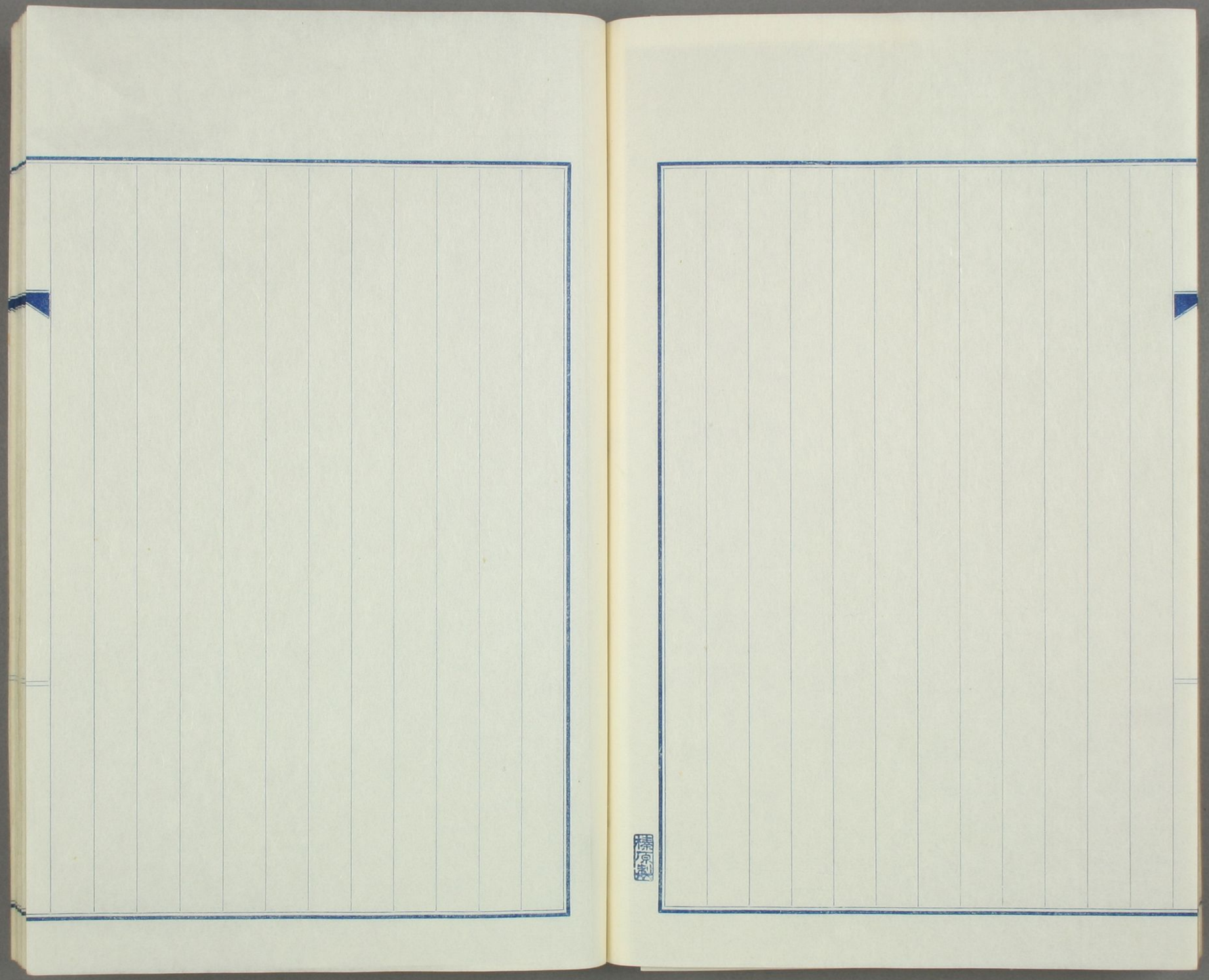
○ペン人飯塚孝次郎氏、東洋、西史、軍務、廣本一部を贈る、此も家義に劣らず敢て珍とすべき書とあらず、但し二巻四巻欠如にて、補写するこゝの村山半牧也余の窪ち此の補写二巻を得たりて其源を受く、飯塚氏に此書柏崎の名家山田鏡吉の藏本にて、先生のかき家を義にして、少牧の筆跡も係り得べし、之れを古本市場に出さば、完本にあらざる故を以つて少数の價を附することも無ん、自分の之れを遺域とすると、手傷と迄年多家の写本を蒐集しつゝあるに、少数の写本にして日都に入る可き利益得

可き、之れを名家写本の為に加へるも可と、田義右山田鏡吉の柏崎の名門にして西を美くし以山田東洋に八丈の子にして意を加へるも亦た及ばず（十一月十日記）

○濱口首相暗殺人が死刑の宣告を受けて気を狂せる大養首相銃殺の海軍士官新聞が決し、何人も其判決を見て来越しにくるを得るべきあらざる所説に五、一五事件の首謀海軍士官に新し検察官の求刑は重きを死刑であるのに、之れを十五年に軽減し判決したのは濱口首相暗殺人の京刑と等しき往庭のあるのは、如何に法庭が異なる軍民共住地が異つても、斉しく同一国家の刑法断罪であるのに、公平を失す

北指置ではあるまいか、畏四の情と云いながらも役人も決して
甲乙い無い、尚る帝国の軍籍に立つこと亦白晝陸伏
を人人ひ公然一四の首相を銃殺するに八日本の四
史に或人と数例のない不祥事である。況を政事犯
で憂国の引誠を知ひさるものいない。人を殺して自
ら金きを得ようとい言語の絶する不都合の裁判
であるまいか、此判決が今後軍紀と必ずるる悪影
響を及ぼすべきやうか、海軍側の裁きと違
常法庭との裁きに不統一を生じ軍人が司法権に
対する影響を無くるであらうか、高人等いと之
れを思ふと極地にさらを得ない。今の陸海軍庭
の時代時流を為すものである。政党の契い横溢

して行政機関腐敗堕落し、僅かに海内
であるのい獨り司法ひ堕ちるに、腐敗がこゝにも入る
と思ふと平等い国民の為め真に寒心に堪へない
ものがある。



新案特許出願中

貴方は『ナーナー』を
御存知ですか!!

「ナーナー」は七ツの小片で出來て居りまして、今から三千九百餘年前のエヂプト神話の物語からヒントを得、これに近代的な數學要素を加へて出來たものであります。

僅か七ツの小片で恐らく數百の想像以上に面白い影繪的なパヅルが拵へられます。

秋の御家庭遊戯にお一人でも心ゆくまで樂める『ナーナー』
是非一度御試めし下さい。

【定價 テキスト共 30錢】

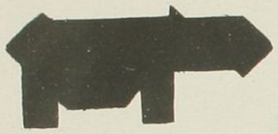
の時今市上ヨリ〇〇と云ふものが
表つてあるつまりくはこれ下火となるにが此きりくは
雪も日本ニ行のんれともので珍らしいものへ。えと
日後ナーナーも効能あり四千年
前埃及の思ひつき
きれとあるが、これも
日本の紙遊の環
とはしまぶ。支那
も七巧圖と云ふ
かあるて七枚の板
を組合へたると稽

の形をあらはす、俗物の時代流行のテキストを
獲利したことも多い。自分は学生の頃から
無いから、さんとナーナーの組板の個々の形を比較す
ることが出来るが、或は多少異なる点があるかも
しれぬ、とにかくこの七巧図は遠い昔支那風の種々の
形を形成するやうなものである。丁度しんのまらのもんん
このフートボールや、メンキーや、ペギンなどを
とが出来るやうなものであるから、さんくの印時
手近でいろいろのものを作ることボックスを取れんを出
る、宣伝の切片でもあるか流行するのも深世である。

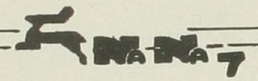
七ツの小片で創造する世界を御存知ですか

"ナーナー"

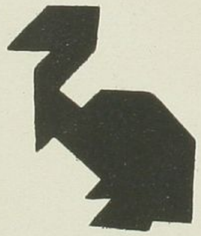
Toys Tiger
• はりこの虎 •



頭の良い皆さんに
是非試みて頂きたい
ナーナー（影繪パズル）
ナーナーには明るい近代味
があります。



此の影繪が何分で
出來ますか!!



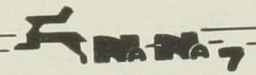
Turkey Gobbler
• 七面鳥 •

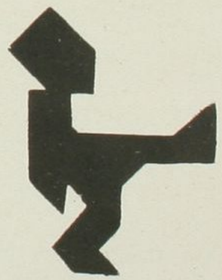
共集題問種十四
一組 30錢

の形をあらいて、産物の陰裏時で支那のテキストを
復刻したことも多い。自分は学生の頃から
小無いから、まんとうしくの紙板の個々の形を比較す
ることが出来るが、或は多少異なる点があるかも
しれぬ、とは思ったが、支那風の程々のあ
を形成するやうなものもあるので、
このフートボールや、メンキーや、ペギンなども
とが出来るやうなものもあるからだ、まんくの印時
手拭ひ、ぼくしたものが若干あるが、ボックせる現れんを
る、宣伝広告ビラなどが流りすぎるのも浮世である。

複原製

・すべり込み・





Foot Ball

・フットボール・

○剃刀は法からの発や装飾の結果多くやはりおいろ〳〵の動機があつたやう、復讐と動機とする
ものは、憎い人の顔を膝頭の下に彫る。彫る時
みつぶすといふやうなのが多い。改心を動機とした
ものは「一心」と言ふ字を彫つた。或の連（赤鞘連）が笠
の内御前の首を月光に照らして義心するとこ
ろを彫つたのもある。女の悪いものの記憶を彫
するなんかは賀駅動の法尾崎の純真の情面
を彫つたものである
迷信から子の多い人が子を欲しいといふので、石童丸を
彫り、乳を利用して赤兒がその乳を吸つてゐる
ところを乳房に彫つたものもある。裏つたのもある

榛原製

夜叉のやうな眼のやうといふのが出た。
コートを彫つたものもある
○俳諧志の類（蕉雪庵北元馬）を投ずること、志の字を
さきにしるす。古俳の御詠、発句もあるから、志に因める
地名の多きを氣がつく
佐志　恵庵（志賀）　胸あく（おもひ）
笠かる（さき）　鼠つき（ねずみ）　垣ろ見（かいまみ）
勝浦契　比翼の（ひよく）　秋立（あきたち）　よばい文
木の葉の（このは）　待宵　豊年　蜘のふるまい
家へ入る　悦び鳥　仲秋（仲秋）　吸付煙草
お流し　ぬかがき　ものいとこ　すいとの日
ちきれの主　野分の会　業祭（わざ）　まく文会

添山　　森こき　そらね　もぬけ　きぬ〜

浪城　　欠義　　志度

皮つるみ　　はしーきつま　　青蛙子

せこ島　　こうの　　先島　　かいひ　　捨て

せる大　　後夫　　いらつめ家の娘　　きえひら　　男めき　　娘

志ルも　　井もり　　蛍　　まくばい　　別鶴操　　つるい別

いなせ　　武義　　いへえれ　　云いんとまんべえ　　八人まま思ひ切也

志の浦　　地名古のうつ

志の山　　引手の山　　ものとつん山　　うらえの山

八九七山　　てまんすの山　　朝夢山　　味噌山

待の多山　　袖振山　　志の山

流川　　四川　　子持川　　志瀬川　　えそめつ川

あひそめ川　　書川　　一夜川　　石畳川

色川　　窯瀬橋　　待後橋　　すぶれ路

たつこうの森　　あハひの森　　うぶ谷の森

忍の森　　志の森　　片志賀　　懸の関

へんしの夫　　人麻の里　　麻の里　　穴夏の里

手枕里　　夢里　　あふせの浦　　別路

姫路　　床路

愛め塚　　志の浦　　石深の路

複原製

拜啓蘭秋の候益々御清祥奉賀上候
陳者今般左記日程により秋季旅行會を催ふし伊賀、大和の國境に
秘められたる天下の仙境、勝地を探勝仕度候間何卒御贊同の上御
參加願度此段得貴意候

十月三十一日　秋季旅行會幹事　黑須廣吉

敬具

市島謙吉殿

記

十一月十一日（土曜）　午後十時十五分東京驛發
十一月十二日（日曜）　午前九時六分伊勢山田驛着直チニ參
宮急行電車ニ搭乘、午前十時三十四分名張驛着夫ヨリ自
動車ニテ香落溪周遊赤目四十八瀧ヲ探勝、女高野ノ稱ア
ル室生寺ニ弘仁時代ヲ代表スル古美術ヲ研究大野寺ノ前
岸斷崖ニ線刻サレタル四丈五尺ノ大石佛ヲ觀賞シ大野驛
ヨリ參宮急行電車ニテ京都七條驛ニ下車直チニ三條通リ
大文字屋旅館ニ入リ京都一流ノ割烹辻留ノ庖丁ニ舌鼓ヲ
打チ隨意散會（即夜十時頃京都驛發十三日午前中東京驛
着歸京ノ豫定）
但シ御希望ノ御方ハ滯在京都ノ紅葉ヲ探勝ノコト

追而御賛否折返へし御報願度候
尚寢台券（上段、下段の別）御入用の御方は來る六日迄に御申
込み願度候

の妻等山形県の生徒の國を生んで、その地を未だ踏破せざるこの甚だ多し。近年前後大いに開けたれ人々く密封さんとする勝槻の地初めて人間に公開さる。多くは妻等祖先が其の地名をもいかに著さりしこと、妻等幸ひに交通の便利の時を生んで、祖先の見る能はざりしこと、今日、えんを等閑に附せざるの誠を免かれず。幸ひに近代の間隙を縫つて、男女とバラブを異にし、一世紀以来夢つて見さるの勝地を探検せるこの二三を止まるべし。今次新の在住に乗じ、荒木十畝画伯の同人数名と共に探検を企つ。日程は仲秋の香茸渓を赤目の四十八瀑を、而して為途吹天四寺宝生寺の仏像を又人とす、一日うつて北著の行路を探討し得るに、今人の仕合と謂ひつるを得ず。

香茸渓に別れんとするに臨み、羽行の汽車を捨て庭行森を越し、望翠伊勢の山田に達し、夫れより大軌電車に乗り移り名張に別る。山口より乗り一時間十五分、名張駅より自動車を駆り渓流に沿ひて北の香茸の地区に入る。北地は御所の地と左つて多く人の動くところ、恵、恵宮の電車開通して初めて赤の地となる。北の渓及び口香茸奥香茸と合して四里に亘つの大渓なり。知撫地方より上れば、山は英雲寺山岩の往状郎瑠璃をなやる岩石が主體となれり。みるのぐ車山青

形を呈し、天斧も削りかねんかと疑はしめ、杉檜の林間なる山骨を隱顯する元景、真に天下の奇觀也、殊に今紅葉の盛期なる湯山錦繡を以つて包み、男性の山溪美の微笑を以つて人を招くの除あり、此の地區に入つてなほ、平凡なる一物もなく、平芽もなく、悉く大昔火山の大活動が此の日一時に鑄成したることを想い起さしむ、其の著しき大龍頭の聳りたるかんが、今い後退低回するに、渓流の所々に湯の香殘りの淵を有するのみ、山の奇形なる、天魔嶽、屏風岩、天狗柱山、鎧岩、燒岩、岩ずるを、天祝仲樹を遺的蔭なきまでに展開する此の横巻の大畫圖に人間の描寫の及ばざる不可なるも、自然の[illegible]

上なる左厳右駢、其の奇峻眺を恨みとするのみ、紀猿の大い富山の黒部を越い遠く、其の山容の美を優なるを覚え、耶馬渓に往之んの比べ、後傑なる[illegible]を行き四里に戻る、時既に四時なる故、右を[illegible]を翻帰路に向ふ、友達と共に山溪皆異なる、弱と名指く点あるも也、

十二時過名残驛と称する一亭に喫飯す、此亭赤岡茶屋の地と称する一行中の茶水中敵なる茶菓と、ブックを展べ老きを茶を走らせ、こんなる赤岡の流を訪のんとする也、

赤目の流の岳渓山麓とお指し、地蔵と書義と四一成図に属し、英雄岳山岩の柱状第瑕をなすもの

唯此一首の瀧あるのみ　他の風景を忘れ、瀧のみを地上の天国の美景と賞し、瀧を上

Akame 48 Waterfalls

Located about 20 minutes drive from Akame-guchi Station on the same Line.

赤目四十八瀧
千手瀧

In the summer of 1927, the Tokyo Nichi-nichi, and the Osaka Mainichi, the most influential newspapers in Japan, held a referendum of their readers for the selection of the most Beautiful View of Japan in the categories of coasts, mountain, waterfalls, rivers, hot springs, plains, lakes and valleys.

①

左上……鬼面岩
左下……蛇子の瀬
左……鹿落の滝
右……龜の背岩
右上……柳瀬（ヤナギセ）
左下……鬼淵（オニブチ）
左上……屏風岩
右上……天狗岩（テングイワ）
右下……天狗淵（テングブチ）
左下……中知岩（ナカチイワ）
左上……羅漢岩（ラカンイワ）
右上……山蒲（ヤマガマ）
右下……不動滝（フドウダキ）
左……千手瀧（センジュダキ）
右……名張川
左……平尾山
右……御案内目録
左……方向
右上……行道滝（ギョウドウダキ）
右下……暗淵（クラブチ）
左……香橋
右……香落渓
左……清滝寺（キヨタキジ）
右下……清滝寺（キヨタキジ）発電所
左……熊野神社（クマノジンジャ）
右……奈良春日神社（カスガジンジャ）
左……三重県
右……名張川
左……三里下れば月ケ瀬梅渓、それより木津川、淀川となり大阪灣に入る
右……参宮電車
左……参宮電車熊倉の遊園地、明治の説明を致す場所には×を附して置きます
右……奇天下の勝
香落渓御案内
名張自動車株式會社
電話一〇・三七三

▲此の御見直し願ひたき場所から香落渓に至る順路で御説明申上げます▲復路は助手や運転手から車上説明を致します

①

左上……鬼面岩
左下……蛇子の瀬
左……鹿落の滝
右……龜の背岩
右上……柳瀬（ヤナギセ）
左下……鬼淵（オニブチ）
左上……屏風岩
右上……天狗岩（テングイワ）
右下……天狗淵（テングブチ）
左下……中知岩（ナカチイワ）
左上……羅漢岩（ラカンイワ）
右上……山蒲（ヤマガマ）
右下……不動滝（フドウダキ）
左……千手瀧（センジュダキ）
右……名張川
左……平尾山
右……御案内目録
左……方向
右上……行道滝（ギョウドウダキ）
右下……暗淵（クラブチ）
左……香橋
右……香落渓
左……清滝寺（キヨタキジ）
右下……清滝寺（キヨタキジ）発電所
左……熊野神社（クマノジンジャ）
右……奈良春日神社（カスガジンジャ）
左……三重県
右……名張川
左……三里下れば月ケ瀬梅渓、それより木津川、淀川となり大阪灣に入る
右……参宮電車
左……参宮電車熊倉の遊園地、明治の説明を致す場所には×を附して置きます
右……奇天下の勝
香落渓御案内
名張自動車株式會社
電話一〇・三七三

▲此の御見直し願ひたき場所から香落渓に至る順路で御説明申上げます▲復路は助手や運転手から車上説明を致します

唯此一道の瀑あるが故に、五人の多く瀑を賞して他の風景を忘る、所以なり此地の奇勝は瀑を止

Nabari to Kōchi 40 min., 80 sen by bus.

Kōchi-dani Valley The mountainous range of splendid scenery along the gorge called Kōchi is separated into two, "Outer Kōchi" and "Inner Kōchi".

Along a winding ... run some five miles ... Directly the Seirei ... and one begins to ...

One feature ... without ... height ... one feel ... by m... as th... and ... drive ... dani ... with the ...

These waterfalls were then selected as one of the one hundred good sights of Japan. The waterfalls are commonly known as 48 waterfalls, but the number of the falls is more than that.

Kōchi-dani Valley

... any ... s the ... dizzy ... iplex w... gh preci... sts keepi... n zigzag ... is said to ... glowing ti... an the spring flowers; nevertheless, one should not miss the splendid ... s to a wooden bridge, the entrance of the ... ni Rivulet is crossed the beautiful scene y comes ... proceed through the extensive gorge of Kōchi-dani. ... ich comes next to the autumn grat...

香落溪

香落の秋はキングゲ・コンゲです

仰げば天を摩す大岩塊

鎧岳・兜岳・屏風岩……

キングゲ・コンゲの胸壁を這つて

ミス・モミヂのピックパレード！

① 左上……鬼面岩 左下……鉢子の瀬

……季節により青鬼、赤鬼の面に見ゆ

……瀬の形に因みたる名稱これより起る

……香落の名稱

……鹿落ち溪

……水中の石、皆龜甲形

……皆稱ふ一帶

……月光紀の碑

……枚岩より成る

……紅葉の一季節には

……名にかゝる風景

……名にしおう人等の

……名に行者の何れも

……名に行者の何れも

……名に行者の何れも

唯此一道の瀧湯ある故なり、五人の多く瀧湯を賞して
他の風景を忘る、所以なり北地の高勝に瀧湯を上

左上……蛇ヲ淵ダミ……瀧水蛇行するより此の稱起る
右左……夫ヨ婦ウト瀧キ……奥八丁、役の行者の修業跡といふ
右上……紅モミ葉ジ淵ブチ……香蓮溪隧一の紅葉の名所
右上……天テン狗グ桂ケイ岩ガン……天狗岩……里人の命名にかゝる
右上……×念ネン佛ブツ岩ガン……昔岩上に山道あり行人南無阿彌陀佛と唱へへて通りしより此の名起る
右上……沖ヲ天テン岩ガン・下シモ經キヨウ塚ヅカ……文人の命名にかゝる……七百餘年前八幡嵯長者の君君小太郎が埋父め母しの菩提を葬ふ傳說地……經文六百卷を
左……沫ワ揚ヤ滝ブチ……昔の瀧壺にして魔淵ともいふ
左……長チヨウ者シヤ屋ヤ敷ジキ跡アト……昔八幡嵯長者の隱棲したる跡なりと傳ふ……一說嵯長者は馬の駐場ともいふ……ひ又米敬場
右上……×上カミ經キヨウ塚ヅカ……下シモ經キヨウ塚ヅカ……全樣の傳說地
左上……×十ジユウ露ロ盤バン瀧タキ……武ブ者シヤ岩ガン……京々しき形なるより此名あり……五つの瀧壺あり……六段に流るゝより此名生る
↑……落ラク合ガウ橋ハシ……三重、奈良縣界
正面上……秩チツ父ブ宮ミヤ殿デン下カ御ゴ成ナリ跡アト……昭和六年の御巡……御成り……御小憩遊ばされた兩殿下
左上……小オ太ダ郎ロウ落オチし岩イワ……八嵯長者の君小太郎が女瞰をつき……山落にし彷彿たる岩……佛成地、朝鮮の金剛
右上……登ノボリ龍リユウ窟クツ……文人の命名にかゝる
左……小オ太ダ郎ロウ遊ユウ園エン地チ……御客樣方の御便利を圖り……昭和七年春……丁歩の設備、楓木、林……樹工事畫……手を櫻、植し遊園……石楠、花數……躑躅の、雜……樹架……施………………

立縁うて四軒あり、蜿曲せる山嶺に八軒あり、きし
うの、[illegible]の流れ、四十八瀬と云ふも実の
概数をいふ迄きす、かくうつくしを八幡宮
流れ、

其等の会後軽装徒歩して先づ延寿院を訪ひ、後のみ
角の開創と伝へ、古くは八坊七堂ありしとか、今は一宇
の小刹あるのみ、唯此院内の四宝の石仏を見る
る銘文代のまゝなる徳流の年号を刻す、こんなも山路
を上下して数丁なれども渓水の風ふるまを見る、乃ち滝之
の入口也、[illegible]に滝之を[illegible]前間
後間と二分し、前間まい行者、鉞子、東[illegible]西[illegible]
懸衣、[illegible]、日千手、[illegible]市の法滝あり、後間

標原製

まい谷、滝、縫、夫婦、降雨、陰陽、釜滝、[illegible]
横滝、現世、[illegible]、岩室、小の滝あり、
滝巡の巡礼の境地なれども書方略く、[illegible]流れ[illegible]雪の
如く拭すごとく、各滝皆[illegible]共の姿を異にして
武甲山、[illegible]、多く源流を[illegible]
渓滝まで最つるまも也、之れを流と云ふ、[illegible]
滝と云ふとあることなれか、苦しい一道[illegible]武甲山
の[illegible]、[illegible]の侵[illegible]
うん段をなして流れたる、而も却つて一種の趣
[illegible]る、殊に今の紅葉の盛侵なる[illegible]白谷に映
し、日[illegible]、[illegible]、錦繍の包まれある如き観い
香[illegible]、[illegible]、玩賞飽くことを知

横原製

然、志ばらく四節を駐めて低回し、但し山路崎嶇、
峯巒の間、渡渓幾度か難き、亨田峠と称する僅かに
三四の瀑を見て、帰路に就しかを過ぎて城とする。
お人名所の番長関に戻り待つこと一時ばかりにて一行
相来り、昼食を終て、更に自動車を駆り、大安寺
を訪ひ、北寺の其の附近に石刻の弥勒仏あるを以つ
て名高い寺である。名張に北なる僅かに十丁
ばかりにて達す、寺前に渓流あつて山を距て地蔵
前刻に二地と同じく山骨柱状をなす山容の
ある所にあるを、余先づ其の山容を望み、寺に入つ
て休憩後、寺を出で、渓流を渡り、更に
十数町にして前岸の巖壁に舟形入石を彫り出す

中に石仏の彫刻あるを見る、彫刻鮮明なる
さまも其の大要を知るを得べく、寺と共の拓本を
得たりき。此石仏は、嬉しくも巻末に資
すべしこの石仏に就ては出来前北冊子に紹介せ
ありて、亦再説を要せず、こゝに更に室生寺
を訪ひて弘仁仏を拝したるに、生憎遠路
修復の為め自動車を駆る能はざりしを
以て、名張に引返し、一行電車に投じ
八木駅に帰着しの電車を乗り換へ七條駅
に達せしは六時半なり三條の旅舎に
文字屋に入る。（北教書店一冊）の印刷物案頭に
ち来る、西国巡礼寺の一前に似ずを以てここの

採集の一行京田中峠を越え木十郎井上翁を訪ひ四月中四日増田義一君須原まで送る事数日間滞在し一行を送る意味にて有名なる木曾の名所を見物し十数名の元渓を書す市中赤松直吉を探して北行を加へらるる旨を聞く日人と郵送す夜増田君一家の金を貸し、新しく、市等の日俗事流を話じんとす、伊藤大丸氏人力車にて村外まで送る、一行皆歩行す、翌日午前出立することを書す二十六分許りにて美濃に達す、夫れ北禁光を語り機会を高ばく得ても高ばく光を北行す

四月一日、増田義一君、須賀さんの外、里伏さんと市
街を通り一行をして遺蹟を巡ることゝなり、午後
市内を通ることゝなり、十数名、元溪を書す
市内赤柱寺を拝して、北行す
かいらくさんしゅう　日人と郵送す、夜増田事務所
京の金、新しく、市等の日俗事を話じんとす、
俗大丸主人、下村氏より、明日午前出発を拒こと
を主人、一行皆歓迎す、
翌十三日、赤柱寺を得て、十時自動車にて孤食
を発す、二十五分許りにて光と幸、貴合は北禁光を
訪ふ様なりとなれば、北行す

十四日　下村（正太郎）の案内で三尾の瀧を見せ
人として九時頃飯を喰すませ
次、光が高山寺を訪ね猶尾高に及ぶ人と

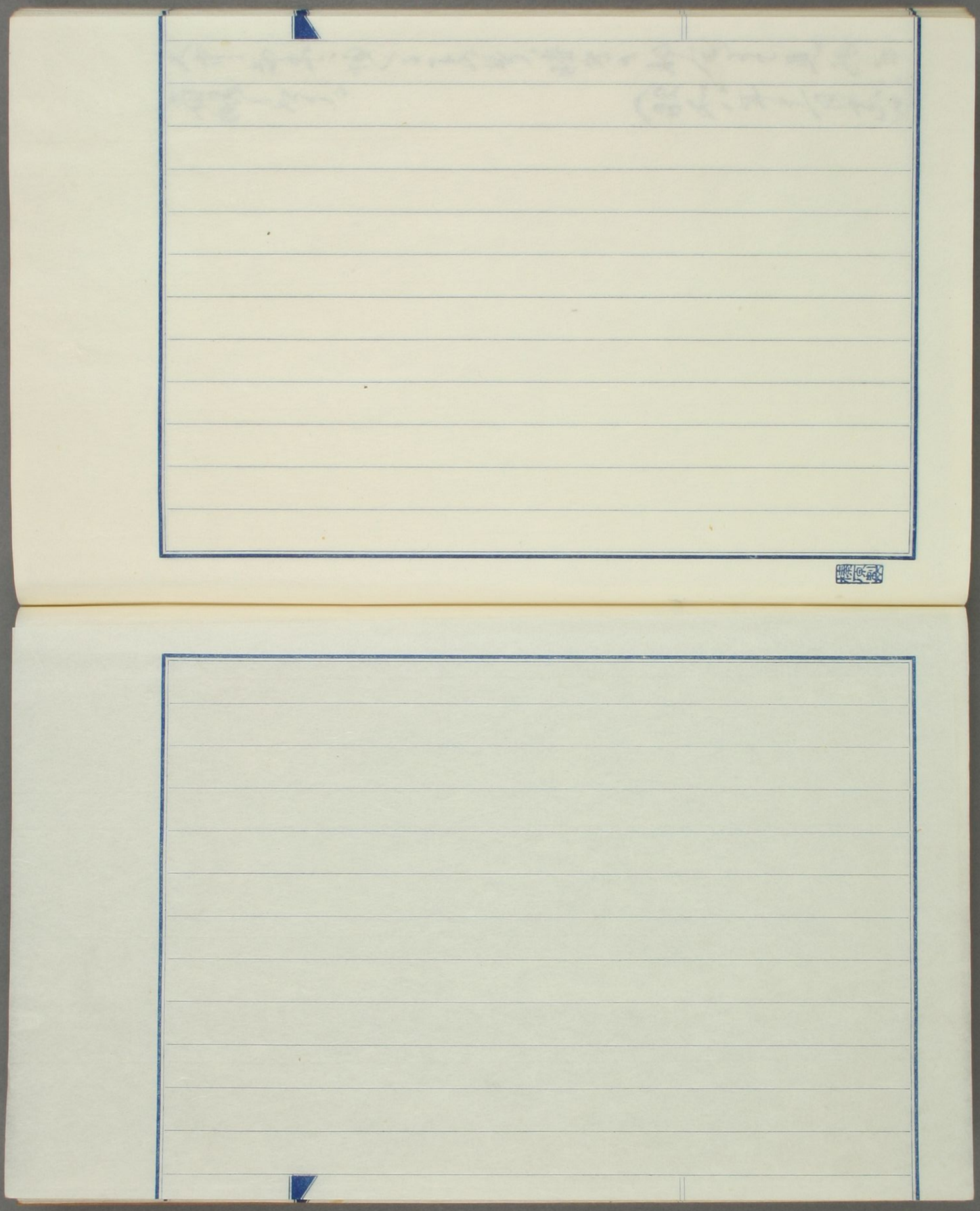
ーセ二十五分許りして梅尾に着しぬ。此辺の楓樹今を
紅黄絶色なり。野倉山河を渡り風景清麗
大紅葉也。余の或る人と尾を跡清しぬ。り年
道路修理梁修梁さん高山寺の殺生禁断も漸やく復
理に就き、貴賤参詣の茶屋すき深くなり、
往日の面目を改めるもの多し。先つ寺を辺
石水院に入り、北の院に後鳥羽帝の御宸翰と伝へ
改築さんなるも尚ほ舊状を存し、国宝の一なり。
此院の縁海を隔てし山に対し、火を吐く蒼樹を
望む一望の内に収まる。絶景云へ方なし。北寺の
住職仏眼禁慎の生身なり、年僅に寺を存
ずれども家出なり。茶菓を饗し慇懃を極む。小憩

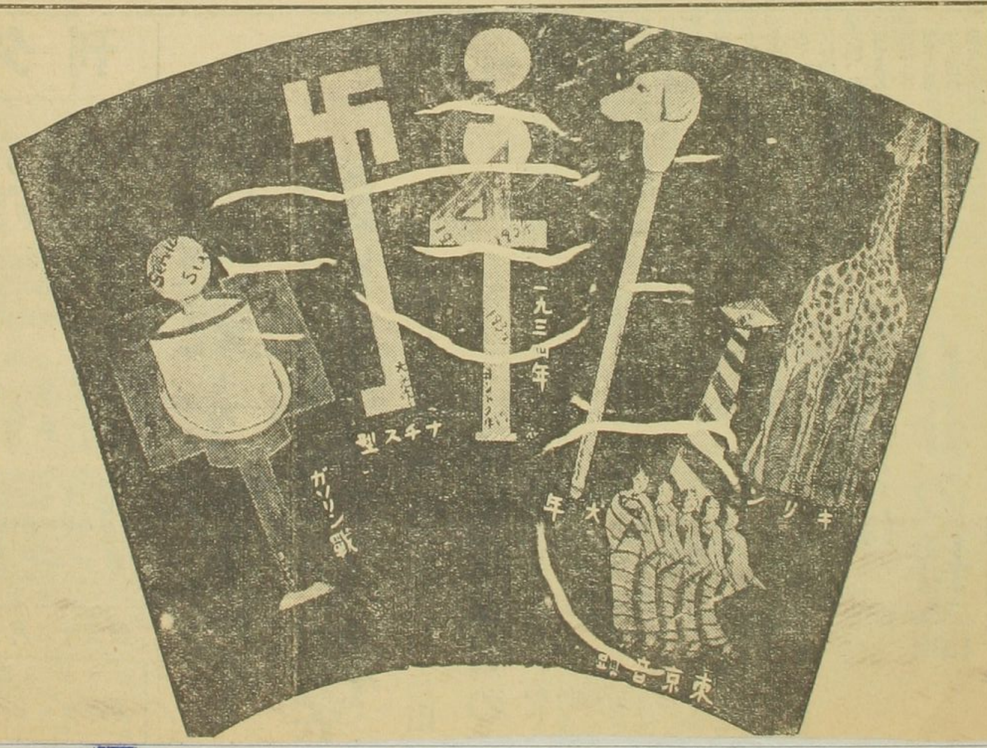
の後直に栗原さん等と共に入口小高き不動の四阿なる中央に梵鐘を掲く、即ち
茶屋の待合なり。梵鐘を掲げ中央に橋不掛
茶屋なり、茶屋の茶人の住宅なりとなる。
茶の手廣なる薄酒の風味掬すべし。寺へ献ずる
の茶の本位なりと思へり。特に茶を満喫し高山寺
の焼印ある菓子を味ふ。寺にも陶器を焼く
事。鳥羽僧正の戯画を写し高山寺の銘あ
り、家づとにと土人が共好を立て、新しく出植
尾を経て徒歩して帰る。一寺に入り
行厨をひらき午飯を喫して帰途に就く。
神護寺に立寄り訪問すること数、北行日

人中あるこゝゆくるこゝあり、時々は都会を見物者吸ひ。

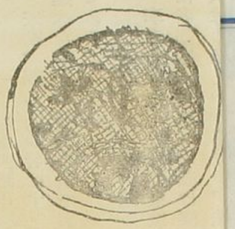
（昭和八年十一月十六日）

標原製





三四年型羽子板



翰墨雜話

墨の今昔（下）

今關天彭

蘇東坡は風流絶世で、しかも巧思のある人であるから、墨を愛するにしても、いろ〳〵の趣巧をした。黄州に居た時には、幾種かの名墨を雜揉して雪堂義墨を造り、海南島に居る時には、海南法墨を造つた。人が好い墨を持つて居ると、時にはこれを豪奪した。イナこの癖は東坡のみではなかつた。李公擇は、この癖を以て名高く、公卿間で豪奪された人は至つて多く、それが座敷へ一杯であつたと云ふ事である。また墨を愛する人は、大體能筆であるのであるが、呂希彦などは、能筆でなくて墨を愛するのだから一寸おかしいが、この人は墨を磨つて、時々嗅つて居たと云ふ話が傳へられて居る。物好きもこゝに至ると氣違ひ染みて來る。かう云ふ次第であるから、士大夫の家では、思ひ〳〵に善い墨を製して、おの〳〵その精巧を誇つたところから、墨工もまた大いに手腕を發揮する事が出來、潘谷や張谷は、當時最も稱揚せられたものである。

前述の如く、當時、茶墨の流行に依り、この二つの勝負をしたと云ふことである。それはどう云ふやうに勝負をしたかと云ふと、詳しくは判らぬが、茶は白いほど好く、墨は黑いほど好いのであるから、互ひに茶と墨を持ち寄つて、その好い惡いを比べて勝負を決したのであらう。蘇東坡は例の佳謔を弄して曰く、茶は白いほど好きも、しかもその黑きを患へ、墨は黑いほど好きも、しかもその白きを患へる、これは相反したことである、墨は一夜置くと色が變り、茶は一日置くと香が減る、茶は新しいほど好く、墨は古いほど好い、これもまた相反したことである、茶は口に好く、墨は目に好い、そこで蔡君謨は老病で茶が飲まれぬので、烹て甄び、呂行甫（希彦の字）は能筆でないから、磨つて吸つて居る、これ眞に一笑すべき事ではないかと。

かやうな時代にあつて「破二墨癖一說」を著はして、墨癖ある

人に一針を打つた人がある。墨癖の本家とも云ふべき蘇東坡門下屈指の文人たる李格非がその人で、なか〳〵鋭い文章である。要領を云ふと、李廷珪の墨が如何やうに好いのか、自分は潘谷の墨を使つて居るが、それと比べて差したる差異を認めぬ、また墨癖ある人は、墨の堅いのを誇り顔に云へど、墨で物を切る刀の換りも出來まいし、墨を水中に入れて置けど變らぬと云ふも、それとて差したる事もない、百餘年立つても腐らぬと云へど、自分は二三年の墨を使ひて、何等の不足を感ぜぬ、墨色が違ふと云へど、他墨を取つて雜へ書するにそれを見分けることすら出來ぬのではないか、要するに墨は實用物である、その實用を考へずして、たゞ虛名に眩惑するは、最も不可であると云ふのであつて、なか〳〵道理ある言葉である。茶の流行に對して、梅聖俞等が指摘した言葉と共に、當時無くてはならぬものであつたと思ふ。

宋代に於ける墨の著述を擧げる。

一、文房四譜中の墨譜一卷

宋初、蘇易簡の著はすところ。筆、硯、墨、紙の文房四寶を述べた中、一卷が墨譜である。大要は朱長文の墨池編に拔萃してある。

二、墨譜三卷

李孝美の撰、大體蘇東坡と同時代の人、上卷は製墨法、中卷は名墨家の製式、下卷は膠の製法及び各家の墨法である。この人はよほどの愛墨家で、佳墨あるを聞けば、千里を遠しとせずしてこれを見、また製墨法を魯山の竈工、野人から聞いたと云ふから、當時名高い徂徠山（泰山の一支峰）に行つて、墨工から聞いたのであらう。そこで上卷の製墨法は、圖を繪いて傍らに簡單なる解說を施し、一讀の下、人をして瞭然たらしめる。また中卷の製式は、名墨家の製品を圖で示したものであつて、これが墨圖の濫觴である。この書は、久しく世間に現はれなかつたが、數年前、天津の陶蘭泉は、文津閣の四庫全書から寫して出版し、又、趙萬里は潘膺祉刻本を故宮圖書館から見つけて出版した。

三、墨經一卷

毛晉の津逮秘書の中に收められ、晁氏撰としてあるのみで、著者の名も分らぬが、四庫提要の撰者は、書中に見える膠法から推して、晁季一の作とした。季一は名を貫之と云ひ、晁說之の兄弟であるから、その時代は、大體前記の李孝美と同時代であらう。

四、墨苑

この書は名高いものなるが、何時の間にか亡佚し、何の時代に誰れが作つたと云ふ事すら分らぬ程である。文獻通考に、董逌の墨譜一卷、李孝美の墨苑三卷と見えるが、李孝美のは墨譜三卷なるより推すときは、馬氏は反對に誤識して居るので、實は董逌の墨苑一卷ではあるまいか。董逌の事、今尋ねるに暇ないが、墨苑が墨譜の前に著はされたものなる事は、墨譜に多く引用してあるのでも明かである。また陸友の墨史に引く黃逌

は、文獻通考の董逌と同一人であるが、董か黃か、未だ考證を經ぬ。

五、墨記一卷

何薳の著はすところ、韓青老農と稱す、北宋末から南宋にかゝつた人。書中北宋に於ける墨に關する逸聞が多い。

元代では朱萬初が名高い。この人は眞定劉氏の墨法を得たと稱して松烟を用ひたが、三百年程も經つた老松を用ひたとの事である。天曆年間に製墨を進めて上旨に副ひ、藝文館に伺候した。當時、詩界の第一人者たる虞道園の詩に、

霜雪摧殘測鑿非。根深千歲斧斤違。寸心不逐飛烟化。還作玄雲繞梁微。

とは、老松を用ふる事を寫したのである。この人は輟耕錄に豫章の人とあるが、墨表に依れば、歙江にては、萬初から百年にして羅小華が出たと書いてある。然らばこの人は豫章の生れであるが、歙州で製墨に從事したのであらう。

さて明代となる。明初に沈繼孫と云ふ人が、蘇州に出て墨を製し、墨法集要一卷を著はした。この書は、墨界には、誠に重要なる役目を務めた。當時は已に松烟時代を經過して油烟時代に入つた。しかも油烟の種類は頗る多く、桐油、麻子油のみならず、皂青油、茱子油、豆油等からも烟煤を製して墨の原料としたが、桐油烟から出來た墨は、色が黑い上に、日を經るに從つて更らに黑くなる特色があるので、墨は桐油烟に橫斷せられる時代となつた。而して墨法集要の一書が、この時代の藍本となつたのである。

沈氏は從前の墨書が、何れも墨工の言を取捨して記述したもので、自身に製造した實歷がない故に、據りどころとするに足らぬ、自分は是等の墨書の爲めに屢々誤まられたとて、都べて實歷から記述をなし、かなり强い抱負がある（最も衢州の墨師から敎を受けた）。項目を分つこと二十有一、浸油に始まつて印脫に終はり、一項ごとに詳細なる說明を施すと共に、圖解に依つて更らに意味を明白にして居る。四庫全書提要は、「錄して之を傳ふ、是れ亦た利用の一端、他の雜家技術の、徒らに戲玩をなすものゝ比にあらず」と稱揚して居るのを見ると、この書の價値が容易に測り知られるのである。また沈氏の人物がはつきりせぬので、提要の撰者は、倪雲林の詩集から材料を引いたのみであるが、私の知るところに依れば、手近いところでは、高青邱に墨翁傳及び墨翁沈蒙泉に贈る七古があり、また文徵明の刻した停雲館法帖には、詹孟擧の叙字一首があつて、沈氏が墨法集要を著はしたことを明記してある。提要の撰者がこれに氣付かぬとは、一寸迂濶に思はれる。

明墨は宣德時代から盛んとなる。宣宗が藝事を好んだ事もその一因であらう。宣德の御墨は頗る名高く、醇茂にして古意があり、宣和龍香劑の遺意を想見せられる。同時に方正、邵格之が出て、些しく後れた羅小華と共に三家の稱がある。嘉靖以後は、方正の子の晃、孫の瀲や、邵青田、同じく青丘や、汪南厓、同じく南石などが名高く、萬曆、天啓となると、文藝の盛んな

時代とて、製墨家も數多く現はれ出た。しかも程君房、方于魯、吳去塵の三家が最も著名なもので、以上の各家は何れも徽州地方の人である。要するに明代の墨は、嘉靖以前と以後とに大別するを得、以前は大味なところに妙味があり、以後は漸次花紋や模式に力を極むるやうになつて來た。

明代の墨界に於て最も話題を提供したのは、程君房、方于魯の軋轢であらう。方に墨譜の著述があり、その畫は名手をして描かしめ、「刻畫研精、細入毫髮」の評がある。程は墨苑を著はし、之れと角逐し、卷末なる山中狼圖は、方に當てたのである。それは方が曾て程の世話になつた上、製墨法を受けたに拘はらず、事に依つて怨を構へたからである。

明代の墨書は、前記、墨譜六卷（方于魯）墨苑十二卷（程君房）が花紋、模式の點に於て、力を極めて刻畫したる外、方瑞生の墨海を擧げねばなるまい。この書は內輯、外輯に分ち、內輯三卷は、從來墨に關した事を集め、外輯七卷は、漢魏から宋元明三代の製墨諸家、及び自身の製墨圖式を精巧に雕刻したもので、何はあれ墨海に於ける集大成と云はねばならぬ。それから麻三衡の墨志、邢侗の墨談、萬年少の墨表などであらう。その外、諸雜書に雜はり出て居るものかなり多いが、今贅するに至らぬ。

清代の墨界は、明代の引續きで、やはり徽墨の獨り舞臺である。清代初期の順治、康熙には、吳叔大、曹素功が出た。曹氏の墨は實用に適すると云ふ事で、士大夫間に重んぜられた。紫玉光は最も名高いものである。雍正、乾隆に汪近聖が現はれ、子の爾藏、惟高、孫の炳宇、君蔚、穗岐、曾孫の天鳳の四代、嘉慶、道光に至るまで墨家の稱を專らにした。鑑古齋墨とは、この一家の製品である。汪惟高は乾隆年間、兩度、召に應じて北京に入り、內廷の御墨は、盡くその製に出で、畊織圖詩墨を初めとして、精緻を極め絢爛を盡した乾隆の御墨は、今猶は我等の眼前に光彩を放ちつゝある。嘉慶の御墨もまたこの一家の製作に係る。かくの如く御物が盡く內廷の製作に成るところから、精妙なる墨工も世に出ぬやうになつたのみならず、士太夫間にも宋明時代の如く好事の人が少くなつたので、民間の墨は、たゞ日用の粗品のみとなり、精製品は全く跡を絕つ次第となつた。是れが百年以來、墨界大衰頽の原因である。

汪近聖一族の墨は、鑑古堂墨藪に收載せられて、その精巧は今更ら云ふに當らぬ。汪家の墨は所有る智巧を傾け、且つ古法をも參酌して、腦麝、金箔を用ふるは勿論、桐膏も漆烟も兼ね用ひ、所謂る膠陳、杵到、烟遠、藥勻の妙を發揮したのである。しかし精巧のみが好いではないが、時代ゆゑ致し方がない。

道光、咸豐以後、殿廷試に楷法を重んずるやうになつてから、松煙墨再流行の有樣となつて來た。それは殿廷の窓戸を開放するので、風に乾きやすく寒さに凍りやすい油煙墨では、十分に書法を發揮されぬが、松煙墨にはそれが無いので、この二つの墨を調和して使用する風が行はれたからである。かう云ふ

事からして墨汁を用ふる風が起つて來た。北京琉璃廠の一得閣の墨汁は、この時運に乘じて現はれて來たのである。

爾來、墨汁は全支に行渡り、その上現代となつては、洋墨の流行が日に廣くなつて來た。そこで從來よりせる製墨法は、費用、時日や、手數を費す事の甚だしいところから、奚李以來相傳の古法は、殆んど絕ゆる形勢となつて來た。有名なる徽墨も、このまゝ推移して行くときは、凡そ幾何の年月を保持する事が出來やう。是れまた時代ゆゑ致し方がないのである。

前例に依つて清代の墨書を擧げる。清初の宋漫堂は愛墨家として聞え、雪堂墨品一卷、漫堂墨品一卷の著がある。二書とも何れも明の中葉以後の墨のみで、古墨は一つもない。次に曹氏墨林二卷がある。これは墨家として康熙時代に名高き曹素功の編するところ、大體投贈の詩文を編したもので、差したるものではない。次に前述した鑑古齋墨藪四卷（附錄一卷）は、乾隆、嘉慶御墨の全體が盡く收載せられて居るから、これを一閲すると、先づ清代の墨を眺眼に收むる事となるのである。

こゝに北平に袁勵準と云ふ人がある。今年は六十歲を出たと思はれるが、書畫骨董に精通し、詩文もかなり善く、書齋に元代の貫酸齋が書いた中舟二字の牓書を懸け、自ら翁覃谿に比して居るが、北平人としては、當代屈指の博雅なる人物で、宋漫堂以後、墨界に寂として人なき今日に在りて、愛墨の嗜好骨を徹し、さまで富裕と云ふでもないが、好い古墨を見ると、價を問はずして囊中の物となし、先づ盛昱の蔚華閣所藏の明墨三十六丸を收め、更らに心を盡して七十二丸を買ひ、中舟藏墨錄三卷を編纂し、前一卷は蔚華閣のもの、後二卷は後に得たもの、都べて一百零八丸の三品（宋人、三十六丸を以て一品となす）を藏して居る。これは今日の墨界に於て、絕無にして稀有なる好事である。しかるに玆に又陶湘と云ふ天津の富商があり、故書舊籍の愛好家として聞えた人であるが、古來の墨法を將來に維持する心からして、前年、宋代から今日に至る有數の墨書を集め、涉園墨萃を刻して世に問うた。

私は文墨方面に篤好を有して居る。數ならぬものではあるが、こゝに敬意を袁、陶の兩先輩に表して、この稿を終る。

米國コンチネンタルオイル會社
最高級自動車潤滑油
米國自動車協會推薦
米國特許製油法
ジャーム プロセスド
コノコ モーターオイル
米國コンチネンタルオイル會社
獨逸エルンスト、シュリーマン會社
東洋總代理店
永井商店
大阪市西區土佐堀通一丁目八二〇號室
大同生命ビルデング
電話土佐堀七九一六番

明治の吉原異聞考（二）

篠田鑛造

△評判の義塾傳毒の療院

明治五年に、吉原廓内へ、沼口美佐雄といふ人が、共慣義塾出張所を開設し、廓内外の男女を入學せしめ、英學を正課として傍ら漢學を教授するといふ、これで廓内の文化を進め、遊蕩世界へ教養の一門を開いたもので、束修月謝及び入學規則を簡便に定め、非常の評判となつた。場所は京町一丁目で、ちらしの文句に曰く『余宿緣あつて、吉原廓内に十有餘年寄宿し、廓内の固陋、異人の蠢愚なるを嘆くも家毎に說くべからず、說んと欲すれども、才學二つながら乏しく依然默視する歳あり（中略）市街に官校私塾の開興數多なるを以て其驥尾に附き輩みに倣ひ、吉原の廓中に小學私塾を營み、他より教官を請じて、多年の朦昧を覺さしめ、僅に報國の微志を表せんと欲し、義を知己に告ぐ、知己元來共慣義塾同社たれば余が素志を憐み、其社長に告て、教官一名を分ち、本塾出張所たらしめんことを約す、於是宿志一時に達し、速に京町一丁目に小塾を開き（云々）但夜を以て日に繼ぐ

廓習なれば毎會夜學の設けあり、童蒙別に漢籍を學ばんと欲せば、望みに應じて讀ましむべし初學階梯の周旋は、余が共慣の一端也』しかるに當時の『新聞雜誌』の記事は、この開校の末文に、痒ぐつたい評言を加へてゐる。

夫レ吉原ハ淫蕩無頼ノ淵藪ニシテ風俗ノ汚穢ナル言ヲ待タズ今學校ヲ設ケテ其舊風ヲ一洗セント欲ス、固ヨリ美擧ト謂ハザルベカラズ、然レドモ僅ニ洋漢ノ文字端音ヲ學ビ有名無實ニ陷リ、徒ラニ幇間藝妓等客ニ媚ビルノ具トナシ、益々生口怜悧ノ慣習ヲ助クルヤウ成行テハ却テ文明教化ノ妨ゲトモナルベシト或老婆心ノ人ノ語レリ

この評言は、痒ぐつたいと同時に、共慣義塾の急所を貫いてゐる。しからばこの沼口美佐雄といふ人物は何人であるか、申歳に十有餘年廓内生活を續けてゐるといへば文久年間から、この色町に住居する人である。漢學者か、戯作者か、通士か粹人かといふて、當時の『横濱毎日新聞』はこの間の消息を物語つてゐる。

東京吉原仲の町中尾屋の隱居沼口美佐雄と云ふ者年來游泥の中に活計を營めども心中白蓮の潔きが如く御一新後既に海内文明の今日に至れども此遊興の地は別に懶惰の固陋を脫れず聊かも文明に進むの志あるもの稀にて舊來の習染に甘んじ幼童教育自然行屆かざるを嘆き昨年來數人を說諭し今年漸く京街一丁目へ共慣義塾と稱する小學校所を創立して英學を以て正課とし傍ら漢籍を學ぶ者は望みに應じて讀ましめ束修月謝を悉く簡便に定め規則を定て毎會夜學の設けもある由眞に奇特の事なり。

これで吉原遊廓の一樓の隱居が、好奇心から思立つた義塾の本體が明白になつたので、多分知己が共慣本塾に關る位ゆゑ、女郎屋の亭主でありながら、學問好きから、多少漢籍を嚙つた程度で、ソコへ文明開化の歐米風が吹込んで來て東京の中で、吉原廓内は少しも觸れてゐない、童幼子女の教養が全く棄て顧られない、これでは世の中

に遇れるなどと考付て、この問校に及んだものであらう、吉原の學校といふのは、新聞の記事に提灯を持つ位評判であつたが、同廓の平泉樓の娼妓若緑は、この共慣義塾に共鳴して若干の寄附をした上、一首の和歌を贈つてゐる。

『言の葉の及ばぬ身にも分入らむ文の林のしるべある世は』併し間もなく、同塾の一室に、池田元岱、月澤融德の兩醫が、黴毒の療治「吉原黴毒病院」の始めこを始めなどしてゐる所を見ると、義塾の運命も、大方察知せられる樣である。

この頃の吉原は、維新直後に拘らず、事實全盛で、盛んに大厦高樓三階、五階造などが建築され、椅子テーブルが用ゐられ人力車、馬車が廓内織るが如く往來して、大臣參議までが頗る遊興に耽つて、當時の賦詩に

試見ル都下文明ノ春　事物開化日々ニ新
三千ノ羅卒辦ニ長杖ー　四萬ノ人力飛ニ大輪ー
電信浮將接ニ上海ー　鐵車道已達ニ横濱ー
更有労原起ニ奇觀ー　五層玉樓勢ニ絳雲ー

△出稼娼妓の自由二伺

明治十六年一月、新吉原江戸町二丁目住吉樓娼妓荘（よそほひ二十六）は、其筋へ伺書を差出してゐる、少々自由廢業のキナ臭い匂ひのする文書で、まづ第一

一、營業に關し貸座敷と娼妓との間にかて、法律の見解を殊にし娼妓より貸座敷主を被告として法廷を煩はす時、娼妓に於て裁判落着まで休業を爲し自宅に歸らんとする時、直ちに娼妓より警察署へ屆出づるも差支なきや。

二、娼妓等其稼ぎ高を以て漸次に返濟の目的にて貸座敷より若干の金を借り後其賤業を廢し正業に就き借用金を返償せんことを企つる時は、貸座敷規則二十條に據り貸座敷主は娼妓の廢業を拒むの權なき者と心得て然るべきや

三、遊客に於て貸座敷と關係なく相當の代價を出し飲食を娼妓に賄はせんと望む時は其意に應するも差閊なしと心得然るべきや

四、淫蕩取締も規則第七條に依り娼妓に

◇…「すめらみくに」に相應せる祖國の固有名稱…◇

我國最古の文獻より近世に至るまでの間に、人口に膾炙する國號を擧げて見ると祖國の固有名稱だけでも左の通り多數に上つてゐる。

豐葦原の千五百秋の瑞の國（とよあしはらのちいほあきのみづほのくに）
大八洲國（おほやしまのくに）
大日本國（やまとのくに）
浦安の國（うらやすのくに）
細戈千足國（くはしほこちたるのくに）
磯輪上秀眞の國（しわがみほづまのくに）
王畿內國（たまかきのうちのくに）
虛空見日本の國（みそらみつやまとのくに）
吾兒所御國（わがこのしろしめさんくに）
上國又可美國（かみつくに）
秋津島根の國（あきつしまねのくに）
皇國（すめらみくに）
皇祖國（みおやのくに）
皇孫の榮ゆる國（すめみまのさかゆるくに）
垂乳根の父母の國（たらちねのちちははのくに）
玉鉾の道の國（たまほこのみちのくに）
日出國又靈秀國（ひいづるのくに）
日本島根の國（やまとしまねのくに）
敷島の道の國（しきしまのみちのくに）
菅靈の幸生子國（ことたまのさちはふくに）
惟神の國又隨神の國（かんながらのくに）
大日本帝國

――神作淵吉氏著「體系的國體新論」より――

標原製

"生きてゐる栄山子"

北の姿勢のハ栄山子用

閲覧室

標本室